の女丈夫であつた。然るに天は彼女に齡を假さなかつた。此は大谷家の不幸と云はんよりも、本願寺の不幸であつた。本願寺の不幸と云はんよりも、寧ろ眞宗の不幸であつた。而して今や吾人は此の痛嘆を、武子夫人の長逝によりて、新たに繰り返す可く餘儀なくせられた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

或者は武子夫人の、雄々敷心と、縱横なる才とに驚嘆して、何故に誤りて女性と生れましたかと惜んだ。されど記者は斯くありてこそ、女性としての生れ甲斐あれと思うてゐた。而して夫人の前途に少からざる望を屬してゐた。嗚呼今や此の望も空しくなりぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

武子夫人は、大谷氏兄弟姉妹に共通する、多量の戰鬪力を有してゐた。而して此の戰鬪力が、一方に於ては、忍苦、守操の貞性となり、他方に於ては、弘敎、濟人の慈悲心となつた。斯くて夫人四十二年の一生は、其の九分九厘まで、享樂的でなく、奉仕的であつた。而して其の不治の敗血症に罹りたるも、夫人が施療患者の手術に立ち合うたる爲めらしく。而して其の病症を激發せしめたるも、疾を力めて、其の奉仕的任務に勤めたるが爲めであつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

世に才女少しとせず、然も才ある者は、動もすれば行なし。世に偶ま美人あり、然も貌の美は、必らずしも心の美と伴はず。但だ夫人は近代的女性の魁であり、而して才色兼美の貴女として、然も其の女性の第一義たる眞德に於て、間然する所なかつたのは、吾人は之を當然と云はんよりも、寧ろ周邊を見廻して、不思議の感に打たるゝ程だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

夫人は其の家庭的意義に於て、恐らくは餘りに多福ではなかつたであらう。され

ど夫人は現代の女詩人といふよりも、夫人其人の一生が實に詩である。吾人は未だ斯る麗はしく且つ悲しき、而して美にして且つ清き詩を見たる例がない。記者は築地本願寺に於て、親しく夫人の遺骸の前に跪き、其の玉の如き容顔を拜した。而してそれが生前に比して、更らに神工の手に作りたる塑像の如く、靈化したる樣を見て、天地の至美此に鍾るの感に打たれた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

昭和三年二月十一日晩來、清水港畔の鐵舟寺に投ず。冷雨簷に滴り、寒風窓を撲つ、一夜耿々眠らず、乃ち起て電燈の下に於て、其の胸中を往來したる感傷の一片を叙す。

（昭和三年二月十四日）

葉德輝君の死

長沙にて相見た

一

支那の近事にして、傷心の一は、葉德輝君が、長沙にて國民軍の爲めに殺されたると、王國維君が、北京に於て投水自殺したる事だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

王國維君の事は、姑らく預りとして、葉德輝君は、湖南の鄕紳であつた。多少の財産も持つてゐたらしい。記者は明治三十九年七月、君と長沙に於て相見た。

予は長沙に於て、十六日（明治三十九年七月）の午前、葉德輝氏を訪問して、

其の所藏の圖書を一覽したることを、記せざるを得ず。葉氏は湖南鄕紳の一人にて、尤も好古の學者。所見總に其の一斑に過ぎざれども、膠泥活字板の韋蘇州詩集の如きは、淸國に之を有する者、只だ三人而已と承る。其他南宋槧の玉臺新詠の如き、北宋金刊—金刊とは金朝の刊也—の埤雅の如き、又た宋槧、王右軍の小楷老子道德經の如き、流石に流涎を禁ずる能ざる珍物と存ず。其他書畫の類、雲烟過眼、悉く記する能はず。（七十八日遊記）

＊　＊　＊

君は予が長沙を去るに際し、湘江丸の甲板まで、其の家刻本一冊を携へ贈つた。而して予も亦歸朝の後、所藏の書卷數種を酬いた。

＊　＊　＊

湖南には其の大先達には、曾文正公あり。而して近時も王先謙、王闓運の如き學者あり。葉君亦た其の一人であつた。惟ふに君の學問は、云はゞ雜學にて、學者間には餘りに重せなかつたかも知れない。されど其の觀古堂叢書や、其の觀古堂書目やを見れば、君が收藏の豐富であり、且つ君が博覽の士であつたかゞ、推知せらるゝ。

＊　＊　＊

特に書籍學は、君の尤も長所の一であつたらしい。君の『書林淸話』と、君の同宗葉昌熾の『藏書紀事詩』とは、斯種の書籍中にて、先づ逸群と稱するに足らむ歟。

＊　＊　＊

予は何故に先づと云うた乎。そは此の二者に比して、曾て民友社から出版したる、島田翰著『古文舊書考』は、其の範圍の廣汎にして、然も其の研究の精到に、文字の犀利、痛快なる、恐らくは支那近時の學者をして、顏色なからしむるものあるが爲めだ。併し支那書籍の刊行に關する知識の目錄は、擧げて葉德輝君の『書

林清話』にありと云ふも、過言ではあるまい。

二

葉德輝君は、湖南長沙の學者であるが、其家は本來蘇州の洞庭東山であり、南宋の名士葉夢得卽ち石林先生の裔と云ふことだ。道光、咸豐の際、其の祖父長髮賊の亂を避けて、長沙に移住した。而して父は賈販を以て富を致し、遂ひに長沙の鄉紳となつた。

＊　＊　＊

されば葉德輝君は、衣食の爲めに學問をせねばならぬ必要なく、其の好む所を恣にした。繆荃孫の『書林清話』の序文に、

煥彬〔德輝〕湘潭の籍を以て進士と成る。政を天官に觀る。而して仕進を樂しまず。親を養うて家居す。經義、字學、輿地、文詞を精研し、旁ら星命、醫術、堪輿、梵夾に及び、貫通せざる無し。凡そ經籍、金石、書畫、陶磁、錢幣、羅致せざる無し。手から郎園を闢らき、水木明瑟の勝を擅にす。兄弟子姪、相與に賞鑑し、人生第一の樂事と爲す。海內知りて其の清福を羨まざるは莫し。

＊　＊　＊

記者が明治三十九年七月、長沙にて君の邸を訪問したる際は、宛も此の清福窩裡であつた。

＊　＊　＊

然るに爾來支那は兵亂屢ば生じ、生ずる每に、長沙は干戈の衢となり、爲めに葉德輝君も、坐から其の清福を消受する能はず。或は蘇州に寓し、或は北京に赴き、寧處に遑あらざる趣きがあつた。

＊　＊　＊

長沙は革命主義の苗圃にして、黄興、蔡鍔の諸先達、何れも湖南出身者である。葉君は固より其の反對者で、革命派からは、恒に狙はれてゐた。而して君が曾て湖南督軍譚銘の政治を非難して、其禍を沽ふや、袁世凱の力によりて、漸く其の一命を取り留めた。

＊　＊　＊

されば君は袁世凱には、再生の恩ありと云ふ可しだ。曾て君が袁世凱の帝號を稱せんとするに際し、頌德表を上りたるとかにて、頗る清議の爲めに煩はされたと云ふ噂を聞いた。併し其の事實は、保證の限りでない。

＊　＊　＊

國民軍の廣東より湖南に亂入するや、君は其の友人、門下が、國民軍中にあるを賴みとし。他人の退避を勸告したるを斥けて、依然長沙に止つた。然るに國民軍は、君を捕へ、特別法廷にて死刑を宣告した。而して君は六十四歳にして、昭和二年四月十三日、長沙に於て刑に就いた。洵とに悼む可きことだ。

三

葉德輝君の『書林清話』には、島田翰君の『古文舊書考』に就て、斯く云うてはある。

日本に於て、森立之の經籍訪古志、島田翰古文舊書考の如き、皆な宋元古鈔各書の考訂に於て、至て精析を爲す。

と。而して屢ば島田翰君の意見を引用してゐる。

＊　＊　＊

且又た其の觀古堂書目の序文の一節に曰く、

昔は明の書估葉景逵　萬寶詩山を選刻す。錢牧翁絳雲樓書目自りして以下、皆誤りて以て宋本と爲す。……孫氏星衍誤りて以て元本と爲す。今に至るまで相ひ沿うて悟らず。錢孫二公に在りては、賞鑒一世に名あり、而して疎陋此の如し。則ち陸心源盡く藏する所を以て、之を日人に售る、而して日人島田翰、轉た無識を以て、相ひ輕薄するを怪しむ無き也。

＊　＊　＊　＊　＊

されど萬寶詩山が、明刊本にて、宋元刊本で無かつたことは、葉德輝君彼自身も、恐らくは島田翰君の說によりて省知したのであらう。そは翰君の皕宋樓藏書源流考に、此事を論ずる詳であり、而して書林清話にも、之を引用して、島田之を駁する誠に是なり。

と云うてゐるからだ。

＊　＊　＊　＊　＊

書林清話には、西村兼文の贋作に就て、亦た斯く記してゐる。

日本水野梅曉の行笥中、文選歸去來辭卷有り、尾に大唐天祐二年秋九月八日、餘杭龍興寺沙門无遠刊行の字一行有り。德淸の傅雲龍纂喜廬叢書中、刻して此種の殘本有り。黎庶昌跋して盛んに之を稱す。島田翰云く、是れ彼國大坂西村某贋刻三種の一、三種は、一延喜十三年文選、一卽歸去來辭、一は其名を忘る。寫經の故紙を用ひて、寫經の舊字を集め、活字擺印す。水野の藏する所正に是れ此種なり。傅黎梯航四達の時に當りて、而して猶欺を受くる此の如し。則ち又た錢遵王が、日本正平本論語集解を以て、高麗本に當て、而して詑して書庫中の奇寶と爲すを怪しむ無き也。

＊　＊　＊　＊　＊

予も餘り莫迦〳〵しき爲め、西村の贋刻を翻刻したる傅雲龍の叢書一部を、前年支那から購入還つた。此れは寫經の文字でなく、宋板の一切經の文字を、切拔い

て活字となし、而して排印したものらしく思はれた。而して予は偶然西村兼文が切り拔いたる、經卷の殘骸に接著したことを、記憶してゐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

惟ふに葉德輝君の如き學者は、左程、世の中に大なる利益を與へざる迄も、決して何等の害を與へなかつたであらう。然るに此の如き學者を、無殘に殺す國民軍は如何に三民主義を高調するも、とても感心は出來ない。

（昭和二年六月）

清浦奎堂翁の喜壽筵に就て

大正十五年十一月十六日、朝野の有志相ひ謀りて、茲に清浦奎堂翁七十七の賀儀を擧ぐ。予が此際に於て、一言禁ずる能はざるは、單に同鄕後進の一人であるが爲めばかりではない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

奎堂翁は、明治の中期より終期にかけて、最も活躍したる一人だ。翁は明治大正の官僚中、蓋し稀に見るの能吏であつた。而して能吏と云ふばかりでなく、循吏であつた。而して循吏ばかりでなく、亦た一個の立役者であつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

翁に多しとするは、其の出身に、何等の他力なく、全く自力もて、其の官吏とし

て最下級より最上級迄、攀ぢ上つたことだ。明治の初期は勿論、その中期迄も、薩長藩閥の勢力は、實に偉大であつた。然るに翁は薩長人でなく、比較的政界に無勢力なる肥後人であり、然も肥後人中に於ても、學校黨にも、將た實學黨にも屬せず、無資、無縁の一措大漢であつた。而して其の今日ある所以は、全く自強不息の結果と云はねばならぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

翁は本來惡戰苦鬪者の一人にして、然も毫もその痕跡を剩さない。翁の及ぶ可らざる所以、それ此に在る歟。翁の人に接するや一團の和氣。此に於て其の交際は、政治界、實業界、藝術界、産業界、文學界、其他凡有る方面に普ねし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

翁は埼玉縣の一小學敎師から身を起した。其の材能は忽ち地方から東京に移らしめ、司法省から内務省に轉じ、内務畑に於て、上にも下にも調法なる一人となつた。斯くて翁は山縣公の知遇を得、世間は爲に目するに、其の配下の一人を以てした。然も翁必らずしも山縣公に求めず、翁の材能は、公をして翁に求めしめた。爾來或は司法省に、或は農商務省に、長官となり、他方に於ては、恒に貴族院に於ける研究會の牛耳を握る、首領株の一人であつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

而して晩年には樞府副議長として、山縣議長の爲めに、留守居役を勗め、公の長逝後は樞府議長となつた。然るに世變は、翁をして首相たらしめた。此の際に於て記者は遺憾ながら、翁に反對せざるを得なかつた。然も翁は在官半歳、遂ひに輿論の趨向を察して、高蹈勇退し、全く林下の人となつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日は翁の功罪を論ずるの場合でない。故に此の方面に就ては、寸毫も接觸しない。されど翁は偏屈なる肥後人にてありながら、偏屈ならず。執著心多き肥後人

にてありながら、比較的淡泊に。而して其の必要以外に、決して他と爭はず。此に於て翁に於ては、個人的反對者は勿論、その政敵と云ふ可き者さへも、殆んど見出さゞるは、良とに珍らしき政治生涯である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

翁や最も廣汎の趣味を有し、最も寛裕の精神に富む。されば其の門戸に出入する者、殆んど社會其物の縮圖と云ふ可きに庶幾し。而して政治以外、君國に報いる所以の道に於て、深く自得する所がある。是れ恐らくは宜園の學窓に於ける、素養の致す所ならむ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

翁や七十七歳の老人にして、頃ろ滿蒙を極め、泰山に上り、中華民國の諸名流と、其の意見を上下して還つた。而して其の旅裝を解くに遑あらず、此の盛會を見る。惟ふに翁の福壽、康寧は、天の翁の淡泊無慾に酬ゆる所以であらう。

（大正十五年十一月十九日）

小久保城南君勅選祝賀會

最近快心の一事は、十二月廿日（昭和三年）東京會館に於ける、小久保城南君の貴族院勅選祝賀會である。勅選せられたる人士、何んぞ城南君其人に限らむ、その祝賀會何んぞ此會に限らむ。但だ尋常一樣有りふれたる事の中にも、吾人をして中心の欣喜を、禁ずる能はざらしむるもの存す。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

城南君は何れの方面から見ても、世上に持て囃さるゝ成功者の一人ではない。君は明治十三年十六歳の頃より、國事に奔走し、國會請願の運動に加入し、やがて板垣伯等の自由黨員となり、加波山事件、朝鮮事件等を經て、當時志士に殆ん

ど避け難き獄中の辛酸を嘗め、以て政友會の長老たる今日に至る。

＊　＊　＊　＊

君の經歷と位地よりすれば、政權利權兩ながら、其欲する所を逞くするに、左程困難ではなかつたであらう。されど君は五十年一日の如く、依然たる一個の小久保城南にて始終してゐる。所謂る成功者の眼から見れば、如何にも氣の利かない男と云はねばならぬ。

＊　＊　＊　＊

君は自由主義者であると同時に、尊皇的自由主義者であり、又た民權論者であると同時に、國權的民權論者である。君は忠實なる黨人たると同時に、忠實なる日本國民であり、苟も君と國との爲めならば、一切を度外視して、直前勇進するを辭せぬ好漢である。若し君に取柄ありとすれば、只だ此丈のことだ。

＊　＊　＊　＊

されば君が前回の總選擧に、選擧場裡より勇退の意志を自發的に發表するや、天下の知ると知らざるとに論なく、君が貴族院に勅選せらる可きを期待し。而して其の期待の裏切らるゝや、天下を擧げて君に同情した。而して其の期待の漸く達せらるゝや、天下の知ると知らざるとに論なく、宛も吾事の如く、皆な手を額にして相慶した。而して十二月廿日の祝賀會は、僅かに其の餘波に過ぎない。

＊　＊　＊　＊

記者は親しく其會に列して、會者の數と質とを視察し、我が日本帝國正義の權威、未だ地に墜ちざる現狀を目擊し、大いに人意を强うするを覺えた。如何に横著者繁昌の世の中なればとて、天下の人心は、尙ほ正義に與してゐる。天下の同情が小久保君に集りたるは、君の材幹でもなく、學識でもなく、手腕でもなく、雄辯でもなく、唯だ其の政治家としての淸操と、日本男兒としての眞骨頭あるによる。

刀水波山意氣豪。　寒梅氷雪見淸操。

老來別有風流在　一擲功名付爾曹

詩未だ調に入らざるも、聊か記者の志を言ふに足る。

（昭和三年十二月）

綱島牧師

昭和二年一月九日は、記者に取りて、惠まれたる日であつた。そは我が同窓、同級の親友、綱島佳吉君の、番町教會に於ける、奉敎五十年記念會に出席し、予の所感を陳述するを得る、好機會を與へられたるが故に。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

予と綱島牧師とは、長く、久しく、而して且つ親しき間柄だ。君は予よりも三歳の兄で、且つ英語などは、同志社在學の當時から、手に入つたものらしくあつた。

而して君は當時から牧師たらんことを期し、予は當時から牧師たらざらんことを期した。爾來五十年、君は一日も牧師以外の職業に從事せず。予は半日たりとも、牧師たらず。與に各〻當初の志を渝へず。共に各〻當初の目的に向て、驀進した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

君の目から見れば、予は恐らくは迷へる羊であらう。されど君は迷へる羊に向て、瓦や石を投げ附けず、鞭を揚げて之を追はず。相見て逆ふ莫く、互ひに相許し、共に白頭の今日に至つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

君は明治大正の時代を通じて、必らずしも基督敎役者中の唯一人とか、第一人とか云ふ可きではあるまい。君も亦た斯る位置を得んことを、自から期待しなかつたであらう。されど親友たる予の眼中には、君の如くして始めて牧師と云ひ度い心地がする。予は君の境界を、恒に健美して止まない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

君は篤信なる基督者であると共に、世態人情にも通じてゐる。或は俗界の予よりも、俗事には通曉してゐるかも知れない。されど牧師以外の仕事には、傍目を振らない。一切の誘惑を排除して、一心不亂に五十年、只だ一筋の道を辿り來つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

君の成功の要素は、同情心の最も濃かにして、其の心地の寛裕であることであらう。君は多年煩悶病院長として、世の隱れたる不幸者の慰藉者となり、善誘者となつた。君は自から義として、他の不義を叱咤し、攻擊するよりも、其の不義の原因や、事情を洞察して、之を道に勸めんことを努力した。而して此れが君に取りて、限なき愉快であつたことは、何たる仕合であらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

君は亦た經世的志趣を有し、特に日米の關係に就ては、多年緣の下の力持をしてゐた。近く一例を擧ぐれば、大正十二年大震災に際し、米國民の我が國民に對する厚意に酬ゆ可く、私設報謝使を以て自ら任じ、米國に赴き、東西南北に奔せ廻りて、講演や、集會に臨んだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

往年新神學の運動起るや、日本の基督敎役者に、少からざる波動を與へた。されど綱島君は、別に何等の影響をも受けなかつた。君はその以前も、その際も、その以後も、依然として一個の面目を保持した。而して始終を一貫した。此れは頑固でもなく、片意地でもない。君の本來の面目だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

世の中には篤信者に限りて、往々偏狹であり、大天狗である。然るに綱島君は寛大であり、且つ如何なる場合も、他と對等である。故らに謙遜と云ふではないが、循々然として、他を誇ひ、他と共に進まんとする態度を持してゐる。斯る譯

合なれば、他を罪人視して、自から義なりとする僞善者風などは、爪の垢程もない。

* * * * * * *

濟レ世 救レ靈 道 不レ貧。　解レ煩 排レ悶 德 成レ隣。
先生何管老將レ至。　奉ニ仕 天 神一五十 春。

此れは記者が、綱島牧師の爲めに賦したる一首だ。惟ふに一切予の君に就て云はんと欲する所は、此の二十八字に盡きてゐる。君は古稀に二年を缺くも、尙ほ壯者の元氣と、情緒とを湛へ、且つ漲らしてゐる。予は君の前途を祝福する。

（昭和二年一月十一日）

師弟の温情

土肥博士の壽像

今日に於て師弟の道などを說くも、時代後れとして、恐らくは相手とする者は少からむ。學問も一種の貿易品となり、敎師は之を賣り、弟子は之を買ふと云ふ世の中に。

* * * * * * *

斯る世の中に於て、偶ま師弟の濃かなる精誼の、社會的發露を見るは、何たる快心の事であらう。乃ち土肥鶚軒博士を中心として成立したる、戊戌會の諸君が、博士の壽像を作りて、之を贈りたるが如き、此師にして、此の弟子あり、此の弟子にして、此師ありと云はむ。

* * * * * * *

土肥博士は、篤學の君子にして、帝國皮膚科の最大權威者だ。博士は東京帝國大

學醫科四年學生の頃、既に外科汎論の著あり。明治二十六年歐洲に遊學し、墺國維納大學の泰斗カポシー教授の門に入り、大いに得る所あり。爾來獨、佛、瑞、伊に轉學し、在外五年にして歸朝し。籍を大學に措き、大正十五年停年退職の時に及んだ。

＊　＊　＊

博士は最初の遊學の後、明治三十五年、明治四十三年、而して最近には大正十四年九月、露國學士院二百年祭に、東京帝國大學を代表して招待せられ、同十月巴里に於ける、國際花柳病豫防會議に出席し、米國を經て、十五年一月に歸朝した。博士の外遊の頻繁は　其の學問研究の日新を期するにあつたことは、云ふ迄もあるまい。

＊　＊　＊

博士の著作には、日本皮膚病黴毒圖譜あり、皮膚科學あり、又た邦文及び獨逸文の世界黴毒史あり。性病學あり。何れも獨創の境地を開拓したるもの少からずと云ふ。記者には緣遠き專門の學科なれば　何とも批評の限りでないが、世界黴毒史は、記者も一讀して、其の史實の搜討、推究に就き、少からざる興味を覺えた。本年帝國學士院が、博士の『黴毒の起源に就ての研究』に對して、賞を授けたのも、寔に其の所由ありと信ぜらる。

＊　＊　＊

博士は必らずしも專門にのみ局促せず。其の專門の學に尤も忠實にして、其の精神は、齡と共に愈よ旺盛なれども。更らに遊刄餘り有りて、西洋の美術史にも精通し、繪畫、彫刻に就ても、鑑識甚だ高きのみならず。其の漢學や、詩文の如きも、優に家を成すに足るものがある。

＊　＊　＊

今ま其の辭官の作を掲げんに、

泮宮卅歳列二清斑一。　官後生涯豈等閑。
多少人間猶有レ務。　著書何必説二藏山一。

此によりて見れば、博士は更に餘勇を鼓して、其の學問を實地に應用す可く、活動せらるゝであらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

又た其の最近作に曰く、

昭和丁卯、六月九日、戊戌會諸子、爲レ我見レ贈二壽像一、
是日開二茗讌一。賦レ此志レ喜。

諸君壽レ我像新成。　車馬嘉賓送又迎。
聖代以レ醫期二報効一。　東方斯學導二文明一。
風薫一榻茗香澹。　日嫩中庭槐影清。
家乘今年私特記。　自知晩節足二餘榮一。

如何にも合作と云はねばならぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

記者は前年結城君蓍堂に語るに、土肥博士の『世界黴毒史』に就て、一言す可きを以てした。然るに不幸其機を失し、結城君亦た不歸の客となる。今日偶然にも君に向て、聊か宿諾を果すを得たるを悦ぶ。

（昭和二年六月十日）

別離の情

――ラーネッド先生を送る――

今人必らずしも無情ならず、古人必らずしも多情ならず。但だ古人に最も濃かにして、今人に頗る淡きは離別の情である。此れは運輸交通の便と不便とにより、斯る相違が出で來つたるものと見れば、今更ら致方がない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

古人の作にて、最も情緒の纏綿たるは、送別留別の詩歌だ。現代人には斯る詩歌を作らんとするも、其の感興が湧かない。然るに昭和三年九月十八日、我が老師ラーネッド先生夫婦を、細雨霏々の日、横濱埠頭に送るの際は、我等は何となく萬葉歌人、唐詩人の心地に蘇へつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ラーネッド先生は、億を以て數ふる米國人中に於て、恐らくは清教徒の醇なる血液と、心情とを傳來せる尤なる一人であらう。先生は新英州に於ける、學界の貴族だ。先生の一族は、概ね學問界、若しくは宗教界に於ける名士である。先生にして本國に在らば、第一流の大學に於ける、第一流の教授であつたらう。然も先生は二十七歳の青年にて日本に來り、兀々として育英の業に從ふ五十有三年。其の畢生の肝血は、最後の一滴までも、悉く我が日本の爲めに、傾け盡した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

先生は眞に篤學の君子だ。育英の傍、其の著作は、政治學、經濟學、教會史、聖書註釋等、凡有る方面に亙つた。而して聖書講解の如きは、改板數次、其の最新板は目下刊行中と云ふ。先生の老の將さに至らんとするを知らず。日に進み、日に新たなるもの、以て知る可し。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

予が先生を京都同志社にて見たるは、明治九年の冬にして、當時先生は二十八歳、予は十四歳、今や横濱埠頭にて相見る。先生八十歳、皓首痩身、老鶴の趣あり。師にして此の如し。其の子弟亦た、焉んぞ老いざるを得ん哉。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

先生は寡默、人問へば答ふ。然も答ふる所、單語に止る。而して予不知焉は、先生の常套挨拶であつた。然も心事高潔、他と較せず、獨り其眞を守つた。而して其の透明なる理知の外皮を以て、其の脈々たる情緒を包んだ。所謂る桃李言はず、下自から蹊を作すもの、先生に於て之を見る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

先生の去るに臨み、至尊は勳三等瑞寶章を授け給うた。先生感激して曰く、是れ予の榮にあらず、我が同志社の榮なりと。先生は實に謙虛の人である。先生は與へんが爲めに日本に來り、凡有る物を與へ盡して去つた。其の得ると取るとは、決して先生の志ではなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

不肖予の如きも、先生に從學の日は少かつたが、然も其の啓發と感化とは、多かつた。予が日本人以外、心から先生と仰ぐは、恐らくは先生一人であらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

先生は容易に涙を流す人ではなかつた。然も其の我等と手を分つの際は、別涙の眼底に溢れんとするを、抑制するに苦んだらしく覺えた。而して我等も亦た『解纜君已遙。望レ君猶佇立。』の情に禁へなかつた。

（昭三和年九月十八日夕、於山王草堂）

新島先生三十八年忌（一月廿三日）

例年一月の下旬に近く毎に、無量の感慨が湧く。そは明治二十三年一月廿三日、大磯に於て、新島先生を亡うたことが憶起せられて。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

先生の永眠と、我が國民新聞の出生とは、間髪を容れなかつた。實を云へば、先生は我が國民新聞創立の計企に、最も同情を表したる一人であつた。予は新島先生の力を假るつもりは無かつたが、其の同情は、無上の至寶であつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

明治二十三年一月廿一日の午後、予は同夜芝公園三緣亭に、國民新聞創立披露の爲めに、吾社と交際ある、若しくは新聞に關係ある人々を招待したれば。主人側として、出席前フロックコートを著け、面を剃る可く、瀧山町の床屋に赴き居たるに、危篤の急電が大磯から到著した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

予は來賓接待の事は、湯淺治郎君に托し、大磯に馳せつけた。但だ此事を牧師小崎弘道君に通知するだけは忘れなかつた。何となれば予は所謂る基督者でないから、先生の最後に立ち合ふには、牧師の必須に氣付たからだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

爾來廿三日午後二時二十分、先生の永眠迄はフロックコートの儘、先生病床の側にて、夢の如く過した。斯くて先生の遺骸は京都に去り、予は東京に還り、國民新聞の第一號は、同年二月一日を以て發刊せられ、今日迄依然として持續してゐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

先生は天保十四年正月十四日、江戸にて生れた。明治二十三年一月の永眠は數へ歳で四十八であつた。人生五十と云ふも、尙ほ二年餘を剩した。若し今日迄生在するとせば、八十五歳である。八十五歳以上の人にして、卽今世の中の爲めに働いてゐる人は、決して少くない。それを思へば、先生は全く壽命に貧しかつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

記者の一生を顧みて、自から幸福としたるは、第一、明治の聖代に成長したる事。第二、我が父母の子と生れたる事。第三は、善き師友を得たる事。而して其中でも、新島先生と勝先生とには、今にも感激の情が新たである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

誰しも年齡と共に、其の接觸したる、若しくは私淑したる人の相庭が高下するものだ。年少氣鋭の際に、崇拜したる人も。老大となりては、頓に其の興味と、愛著とが消失するものがある。されど新島先生の如きは、今にも記者の胸中に活きてゐる。記者には先生は、到底故人とは思へない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

先生に就て語る可き機會は、他日にあると信ずる。但だ記者は先生に對して、聊か他と見解を殊にするかも知れない。先生の永眠後、長き人生の行路に於て、若し先生にして在さばと思うたこと幾度ぞ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

先生の墓銘を書したる海舟翁も、今は洗足池畔の、五輪塔下に眠つてゐる。時も變れば世も變る。白頭の門生、遙かに洛東若王寺山頭の一片の石を望み、斯文を献ぐ。

（昭和二年一月廿三日）

新島先生の書翰

過日同志社同人相會し、談偶ま新島先生に及ぶ。一人曰く、先生は情熱の人なり、その感情の猛烈、驚く可きものあり。一人又曰く、その猛烈なる感情を抑制する、先生の意志の力に至りては、更に驚嘆の外なしと。何れも能く先生を知る者の言だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

新島先生は、一見溫良恭儉讓の紳士であつた。然もその性質は水の如く靜かでなく、火の如く熱してゐた。先生の顏色が青味を帶び、その音調がやゝ微震を帶ぶるの際は、その胸中には千萬の激雷が轟いてゐるのを徵證するものであつた。但だ先生は百回の中に、九十七八回までは、これにて切り止めた。

＊　＊　＊　＊　＊

過般臺灣に遊び、臺北において、臺灣神社參拜のみぎり、宮司山口透君と相見た。君は社務所において、予と相語るの次、偶ま新島先生の君に與へられた手書を出して示さる。

生の不遜を厭はず、不德を顧みず、幸に一書を投ぜられ、深切至らざるなく、丁寧盡さざるなし、生の德を立つるの固からず、道を修むるの厚からざるを譴む。生不敏と雖、敢て兄の訓誨を奉戴せざらんや。過を知りて之を改めず、非を見て之を蓋ふは、生の最も慚づる所、兄の如きは一面識の人なりと雖、幸に言を寄せられ、生の不德を譴む。生一讀汗背に流れ、再三復讀、恰も大患の良醫に逢ひ、病痾の速に治せずんばあるべからざるを了知するに似、又却て兄の生を顧みるの深且厚きを謝す。兄の如きは、實に一見舊の如きの良友といはざるを得ず。嗚呼良友にあらずして、誰れか克く如斯き訓誨を忝うせらる

べけんや。

＊　＊　＊　＊

生基督教を奉じ、頗道徳を修めんことを希圖すると雖、徳の高き尚天の如し。日夜生の及ばざるを憂ふ。一徳に得れば、衆徳に失び、一行に勉れば、衆行に怠る。温柔平和を求めて、或は之を得ると雖、又事に臨み忽ち之を失ひ、知らず知らず舊法の制御する所となり、或は發して怒濤の如く、或は動いて激浪の如く、自ら檢束する能はざるに至る。是れ生の性質、是れ生の大患、生の平素皇天を仰ぎ痛嘆し、同胞に向ひ、慚愧して止まざる所。今回幸に兄の活眼、生の大患を摘發せらるゝに遭遇す。生不敏なるも、拳々服膺兄の訓誨を奉せざらんや、生過を知ては、之を改むるに吝ならざらんとす。兄幸に休慮し賜へ、生兄の書を讀み、沈思默考するに、兄は言葉を以て生を愧かしむるの類にあらず、自ら徳を修め、徳を以て生の非徳を矯めらるゝに似たり。生不敏なるも、徳を慕ふの念尚克く心に存す矣。生深く之を心に銘して忘れず、愼で兄に謝せんと欲す。

＊　＊　＊　＊

先生と山口氏とは、全く初めて對面したる間柄であつた。山口氏が何故に、はた如何なる理由もて、先生に忠告狀を送りたるかは、詳かにこれを聞かなかつたが、惟ふに問題は恐らくは基督教に關したことであつたらう。

＊　＊　＊　＊

予はこの書翰を一讀して、豫て予の胸中に描きたる新島先生が、この書翰中より活躍して出で來りたるかの如き心地した。しかして前輩の克己、修養、とても我等放慢、粗笨の徒の容易に企て及ぶ所にあらざるを愧悔するもの、これを久うした。

（昭和四年五月八日）

我等の樂かりし日

―亡弟を憶ふ―

秋雨は連日降りつゞく。さなきだに秋は淋しきものを。

＊　＊　＊　＊　＊

吾弟逝いて、早や十日を過ぎた。世間では仲惡しき兄弟の樣に傳られたが―それも恐らくは一徹なる弟の著書によりて―事實は決してそれ程ではなかつた。少くとも兄たる予は、何時も我等の樂かりし日を、繰り返し想起してゐる。明治三十年、予が世界遍遊から歸朝しての數年、弟は逗子老龍庵の附近、柳屋の座敷に、其の新世帶を持つてゐた。予が土曜から日曜にかけて、双親を省する毎に、屢ば弟を拉へて釣に出掛けた。我等兄弟は、何れも釣にかけては太公望程度であつた。魚を釣るが目的ではなかつた。

旦浮二湘海一把二漁竿一。　身卅悠悠獨自寛。
秋水夕陽千萬頃。　芙蓉倒景畫中看。

併し當時は鱚なども、若干は釣れた。今は人魚に勝ちて、其影だに見當らない。

＊　＊　＊　＊　＊

予は白狀するが、不如歸を讀んで泣いた。而して伊井の武男、喜多村の浪子、高田の片岡中將を見て泣いた。當時弟に『由來軾轍是智音』と云ふ一首を貽つたが、只だ此の結句のみを記憶してゐる。

＊　＊　＊　＊　＊

何時ぞや弟に舟を棹さしめ、田越川を溯りて、現時の魚樂園、櫻山莊の邊に到つた。當時は一面の葭葦叢生して、川の兩邊は、何れも沼澤で、只だ此處彼處に松や、川柳が生じてゐた。宛是れ扁舟一棹歸二何處一。家在二江南黃葉村一。

の風趣があつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

而して予は偶然此處にて、黒鯛としては小に過ぎ、『かいづ』としては大に過ぐる的の代物を釣り上げた。それを釣針から外す際、餘り周章て、鰭にて手を傷けた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

當時鳴鶴岬の海岸には、埋立工事が行はれてゐた—今日は既に松林となり、其中に幾許の家屋が建つてゐる—其の埋立地の中央には、自然に池が出來た。弟は此の池中に魚族が群り居るを偵知し、予を誘うて、兄弟兩人、漁竿を携へて、屢ば此の池畔に出掛けた。然もやがて池は全く埋められ、弟は逗子から東京の原宿に移轉した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

千歳村には幾回か双親に侍し、若しくは妻兒を伴ひ、時としては祖父母から孫共まで、相擧りて出掛けた。春の摘草、首夏の筍飯、秋の雜木林、何れも我等の樂事であつた。

殘紅新綠護ニ衡門一　繞レ舍禽聲清夢魂。
不レ用桃源廻レ棹去。　一家鷄犬自成レ村。

此れは明治四十四年の晩春首夏の交の作だ。中間十有五年を隔て、頃ろ訪問すれば、樹木深々已に山を爲してゐる。而して物在人無の感に勝へない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

何時ぞや我等は打連れて、菊黄柿紅の節、粕谷から玉川の二子邊まで、一日の秋晴を、遊び暮らした。末女は弟が脊にし、その姉は予が脊にした。今や彼女等は、己に一家の主婦となり、人の母となりてゐる。而して吾弟は逝き、兄も亦た漸く老いつゝある。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

吾弟は孝行者であつた。旅行する毎に、隨處から兩親に物を齎らし献げた。去る廿四日の日曜に、久し振りに逗子に赴き、子や孫と共に、櫻山に上つた。而して弟の日光及び鹽原から携へ來つた楓樹が、既に林を爲しつゝあるを見て、其の側の石上に腰打掛け、良久しく過ぎし樂事を冥想した。

（昭和二年九月二十九日午前九時、秋雨凄其の日、山王草堂に於て）

弟の手紙

九月と云ふ月は予にとつては、種々想出の多き月である。九月五日には國民新聞社がポーツマス事件で燒打に罹つた。九月十六日は吾子の命日である。舊曆ではあるが九月二十六日は吾父の誕生日である。而して九月十九日は吾弟が伊香保にて逝きたる日である。しかもそれが本年で三週忌とならんとしつゝある。

＊　＊　＊　＊　＊

亡弟はその一人の兄たる予に就いて、屢々語つた。直接、間接に予自身が亡弟著作の材料となり、又た予に依つて供給せられたる材料は、恐らく殆んど彼の著述の總てとは云はざるも、多くの中に見出さるゝであらう。併し予は唯だ一回を除くの外は、未だ曾つて亡弟に就いて語つた事は無つた。その一回と云ふは、亡弟の柩の前に立て、青山會館に於ける葬儀の際、追悼の言葉を述べた事である。

＊　＊　＊　＊　＊

予は何故に語らなかつたのである乎。それには深き理由がある。されど今此に其の理由を陳る必要はあるまい。唯だ此頃土用干に、古き葛籠を開き來れば、予の爲に亡弟が謄寫しくれたる凡有る文字、若くは亡弟が予に與へたる多くの書翰等が出で來るものを、手に任せて讀み來れば、良に感慨に堪へぬものがある。その跡に就いて見れば、亡弟が獨立して一個の文人となる以前には、予の弟である

と同時に、門人でもあり、文事的の祕書役でもあつた。これで予が便宜を得たるは勿論であるが、亡弟も亦たこれに依つて自ら得る所の多かつた事は、疑を容れ無い。

＊　＊　＊　＊　＊

今手紙の中から手當り次第に一二のものを抽出すれば、第一は亡弟が未だ同志社在學中、予の出世作とも云ふ可き『將來之日本』の刊行に就いて、予に與へたるものである。

『御兩親を初め奉り尊兄愈御勇壯不堪欣賀之至候。從而私事も不相變同志社之城内に蟄居して、日々東山三十六峯之烟霞を餐し居候間、御放念可被下候。

將來之日本は新島先生より確に拜受仕候。結構之雄麗にして議論之透徹なる、筆勢之飛舞跳梁して別に一種優麗秀俊之妙味を具へたるが如きは摩氏が、"Nooks and dells, beautiful as fairy land, are embossomed in its most rugged and gigantic elevations. The roses and myrtles bloom unchilled on the verge of the avalanche.

と彌耳敦之詩を評したる語を移して以て評すべき乎。其問題之更に雄大にして、御筆力の更に進歩し玉ひしに依るか、之を十九世紀之青年に比すれば、更に幾層之優を覺ふ。

猶亦 Dedication の數句は實に千萬無量の情趣あり。私事も遙に御兩親樣之御愉悦、尊兄之御心情を推察仕候事に御座候。只慨らくは尊兄既に洛に入りて東坡之雄名を轟かし玉ふと雖ども、劣弟未だ子由たる能はざるを。

尊兄人樣

今月分之學費は確承仕候。』

徳富健

＊　＊　＊　＊　＊　＊

これは多分明治二十年の初、『國民之友』の未だ發刊しない前であつたらうと思ふ。猶ほ本書に『千萬無量の情趣あり』と記したる『將來之日本』の卷頭 Dedication の文字は左の通りである。

『余をして人情の重んず可きを知らしめ、己を愛し、人を愛し、國を愛することを知らしめ、眞理の線路を走り、正を踏んで懼れざることを知らしめたるは、皆爾の敎育に是れ憑るなり。余が此の冊子を著述したるは、全く爾の敎育したる所のものを發揮したるなり。而して余が著述を世に公にするには、此れを以て始めとなす。余は聊か之を以て爾の老境を慰し、爾の笑顏を開くの著歩なりと信ず。故に余は謹んで此の冊子を余が愛し且つ敬する双親の膝下に献ず』。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

而して今日から見れば、文人としての亡弟の位置は、天下自ら公論の存するあり。固より予の呶々を要しない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

又た明治三十四年の頃、福澤翁が瘦我慢の說を發表して、海舟先生の出處行動を批判したるに際し、予は敢へて海舟門下の士を以つて自ら居るでは無いが、聊か先生の心事を解したる一人として、これを駁擊した。當時亡弟は左の手紙を與へてゐる。

『瘦我慢の說を讀む』近來の大快文字、海舟先生も地下に笑を含み玉ふ事と存候。

群小の爲めに眼界を擴大し、先後する所を知しむ。世敎を裨するの大文章、獨り海舟先生の爲めに寃を雪ぐのみならんや。

日曜朝　健拜

家　大　兄　机下』

これは日附が分らぬが、申迄も無く予の文を新聞紙上で讀んだ刹那に、直にその第一印象を記して送つたものであらう。

＊　＊　＊　＊　＊

それから次に見當りたのが、亡弟が千歳村粕谷に移住した當時の書翰である。

『拜啓仕候。其後は漸次元氣御回復と奉存候。當方事も去月廿七日當所に移住。急に天井を張るやら井戸を浚ふやら、屋根を繕ふやら、障子を張るやら、大騒ぎ致し、昨今先づ一段落と申す所に立到り候。鶺鴒一枝幸に御安意被下度奉願候。

家は先づ堀立小屋式少陵の茅屋ならずも强風は屋根危く候。南向きの日當りよく、風もよく當て申候。眺望は極よろしく、後の雜木林よりは、雪の富士を眺め候。澁谷よりすれば三軒茶屋まで玉川電鐵。其れより北西に折れて松陰神社入口を通り過ぎ世田ヶ谷小學校附近の石地藏より北西折して一里には足らず候。新宿よりすれば、甲州街道を山谷若くは烏山まで徒歩二時間。其れより十町程に御座候。新宿よりは午前二回、午後二回（九時半、十一時半、三時半、五時半）、調布通のガタ馬車發し、烏山、若くは山谷よりの歸り馬車も大抵午後は四時、五時の際に通り申候。當方今少し落つき候はゞ、あらためて御案内申上ぐ可く候間、其節は御夫婦、子供殘らず御連れにて、一日の御來遊奉待上候。

昌龍叔、倉園家不幸相ついで、實に逝者如水の感切に西行法師たらざるも、『夢を見る〳〵はかなくも猶驚かぬ吾こゝろ』の鈍きを感じ申候。尊翁も多少の打擊を御感じ可被成と恐れ申候。色々申上度事も有之候得共、追々の事と仕るべく候。不盡。

（明治四十年）三月六日　健拜

家大兄机下

（封筒）

東京市赤阪青山南町六ノ三十

徳富猪一郎様

府下北多摩郡千歳村粕谷三五六

徳富健次郎』

今では此の方面も都會の延長となり、文化住宅が出來るやら、電車網が縦横に通ずるやら、實に昨非今是の感無き能はぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

猶ほ左に掲ぐるは、亡弟等の移住の當年の秋、吾等が家を擧げて訪問したる際の事だ。

『先日は嘸御疲れと奉存候。誠に希有の愉快なる一日を送り、彼夕五日の月の影を踏みつゝ、野路を家へと辿る道すがら、衷心の欣喜難禁、皇天に感謝仕候事に御座候。一同に宜敷御傳へ被下度奉願候。

（明治四十年）十一月十三日朝　健次郎

兄上様　愛

姉上様

（封筒）

東京市赤阪青山南町六ノ卅

徳富猪一郎様

千歳村

徳富健次郎』

＊　＊　＊　＊　＊

當日は一家の子供を伴ひ、亡弟の家を訪問し、更に亡弟夫婦、吾等夫婦、子女打連れて粕谷より玉川畔に至り、二子の渡から吾等は道玄坂を經て青山に歸へり。亡弟等は三軒茶屋から又た千歳村に歸へりたる其の後の心持を、如何にも素直に云ひ送りたるものと覺えてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊

當人にして在らば、猶ほ語り度き事は澤山あるが、今更ら逝ける人に向つて告ぐるも詮なければ、惟だ此等の手紙を繰返し、卷返して、往時を偲ぶ事とはなしぬ。

（昭和四年八月十九日、民友社に於て）

亡弟墓畔種樹の記

日長似二少年一と云ふが、老人となれば、それが逆となる。月日のたつのは、實に速い。吾弟を粕谷村の櫟林の裡に埋葬してから、早や一年を經過した。埋葬の當時から其の墓側に二株の樹を栽う可く、未亡人と約束し置いた。それは亡弟の生前に、かねて携へ贈らんと期してゐたが、彼是の事情にて、果すを得なかつたからだ。

＊　＊　＊　＊　＊

我等兄弟は、樹木を愛する趣味に於て、全く合致してゐる。此れは故淇水老人から、遺傳したものであらう。亡弟粕谷の恒春園には、凡有る樹木が植ゑられてゐる。樫や欅は云ふに及ばず、椎、白樺、ヒマラヤ松、木蓮、百日紅、大山蓮華、山櫻、槭、而して何れも拱を成してゐる。

＊　＊　＊　＊　＊

大正六年十月廿六日、予等は支那山西省の大同府から汽車にて、滿天滿地の雪を

衝き、張家口を過ぎ、同夜北京附近の湯山溫泉に到著した。此處は康熙大帝の離宮にて、當時は溫泉ホテルとなつてゐた。

朔風白雪雁門邊。　凍雨寒雲八達巔。
今日黃楡丹槭裡。　一泓明鏡浴溫泉。

此れは詩と云はんよりも、當時の寫實記錄である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌朝庭苑徘徊の際、其の並樹である扁柏や、槲の實を拾ひ、之を逗子老龍庵の庭に播きたるに、大正七年の春には芽を吐き、それから漸次成長した。亡弟の墓側に植ゑたのは、此の扁柏だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

昨年から根を廻し措き、去る十月十四日、逗子より携へ還り、十五日粕谷に齎らし、之を植ゑた。周邊の櫟や、栗や、楢や、樫に比すれば、如何にも稺小である。

如何にもヒョロ〳〵として、貧弱である。されど歲月と俱に、墓の標木となるであらう。別に豫備として、其の附近に一株を植ゑて置いた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

人は花卉草木が、若し語を解せば、如何に面白からうと云ふ。但だ予が樹木を愛するは、其の不言であるが爲めだ。古人は目擊道存と云うた。眞の佳趣は、不言の裡にあり。故らに奇說を弄するではない、予は實に樹木が默々として榮え、默默として枯るゝを愛する。之を墓中の人に質さんとするも、彼も亦た默々として語らない。

（昭和三年十月二十三日）

相模一日の旅

一　寒川神社

偶ま電車などにて、出會すれば、御身は能く旅行せらるゝ、毎度遊記を面白く拜見すなどとの挨拶を承る。されど予は旅烏ではない。纔かに日課の餘閑を偸んで、小遊を試みるのみに過ぎない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

扨も十月十日、昨夜よりの雨、未だ霽れざるも、豫ての約束なれば、末子武雄を伴ひ、午前五時半大森山王草堂を出掛けた。横濱にて中山毎吉翁、金田君と出會す。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等は茅ヶ崎驛より相模鐵道に乘替へ、寒川驛にて下車。寒川小學校なる加藤君自動車にて迎られ、木島國手の邸に赴き、相ひ伴うて、梶原屋敷の跡を見た。一の宮は梶原平三景時の所領であることは、吾妻鑑にも見えてゐる。

正治元年十一月十三日、梶原平三景時、雖レ下二給彼訴狀一(諸將の景時に對する)不レ能二陳謝一、相二率子息親類等一、下二向于相模國一宮一。十二月九日、景時自二一宮所領一、歸二參鎌倉一。十八日景時被レ追二出鎌倉中一。仍下二向相模國一宮一。

とある。寒川村は一之宮庄にして、倭名鈔には寒川郷とある。寒川神社は、相模國一宮なれば、自から一之宮庄の名も、出で來つた。

* * * * * * *

神社の參道には、一帶の老松、鬱蒼として並列し、如何にも神々しくある。社域古は二萬千四百五十九坪と(新撰相模風土記)云ふ。今も一萬二千四百坪あり。但だ十二年の大震災に、社殿其他一切崩壞し、今や再建最中だ。

* * * * * * *

本社は尤も由緒舊き一にして、祭神は古來より幾多の說がある。今は寒川比古命寒川比女命と定められる。恐らくは此の地方の開拓の大祖であらう。當時關東文化の一面が、相模川流域の兩岸に溯りて開けたることは、紛れなきことなれば、其の創業者が、祠祭せらるゝは、固より當然のことだ。

* * * * * * *

予等は中島宮司の案內にて、神前に榊葉を獻げ。而して神殿新築の邊を一巡した。新築は十七萬圓にて、國庫支辨、大正十九年に竣成すと云ふ。其の基礎は鐵筋コンクリートにして、其の木材は臺灣檜である。古は御本殿棟九尺、間九間、幣殿、御供藏之に相應し、廻廊三十六間七尺五寸あつたと云へば、それには及ぶ可くもないが、然も中々立派な構造だ。

二　寒川神社の寶物

古は藥王寺ありて、神社の別當職を勤めた。今の社務所は護摩堂である。我等は中島宮司の肝煎にて、神庫より凡有る寶物、文書等を出して拜觀した。

＊　＊　＊　＊　＊

古文書には、此れと指點す可き程のものもなかつた。但だ神官と、神僧（藥王寺）との訴訟に關する數通は、其の年代の江戸開府以後であるも、史家の資料とするに足るかと思はれた。秀吉の天正十八年小田原征伐前後に際して、北條家、若しくは秀吉側の文書のある可き筈だが、一通もない。御朱印狀は、概して謄本のみだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此間に於て、吾人をして驚喜せしめたのは、四個の棟札である。其の一は、

相州一宮御寶殿、敗壞日久矣。依レ之奉二再興一。所レ冀國家安泰。人民快樂。
子孫繁衍。兵戈獲利。
大永壬午九月吉日

相州大守
北條新九郎平氏綱花押

此の棟札は、厚さ一寸、廣さ四寸、長さ三尺位かと覺ゆ。（目量、實測にあらず）

而して其二は、第一と略ぼ同形にして、

相州一宮御寶殿、敗壞日久矣。依レ之奉二再興一。所レ冀國家安泰。人民快樂。
子孫繁衍。兵戈獲利。
天文丙午三月吉日

相州大守

平氏康花押

とある。氏康の花押は、特に鮮明にして、昨日書きたるが如くであつた。大永壬午は、大永二年。天文丙午は、天文十五年、大永二年は今を距る四百零四年。天文十五年は、今を距る三百八十年。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

從來何れも兵戈獲利を、兵戈權利と讀ましめてあつたが、予は之を獲利と讀んだ。字が權と讀み難きのみならず、權利では意味をなさぬ。而して武運長久などと生ま溫る文句でなく、兵戈獲利と率直に言ひ破つたところに、時代的精神を知る可きものがある。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

第三は、全く形式が異りたる幅廣き富士山形の立札にて、權大僧都法印慶印、權大僧都慶尊の名が記せられ、『天正六年戊寅十二月十三日遷宮成就』とある。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

第四は、第一、第二と同形にして、

相模國一宮寶殿朽敗久矣。今新葺レ之、加ニ修補一訖。唯冀武運長久、家內繁昌、以益輝ニ神威一也。

正保三年九月吉日

從五位下杉浦內藏允
平正友花押

とある。試みに正保の棟札を以て、大永、天文のものと對照せよ。其の文句の相違が、不用意の中に、時代の變遷を、（太平と亂世）雄辯に物語るではない乎。

三　寒川より依知

寒川神社神寶の兜は、武田信玄著領の物と云ふ。鉢は總て黑漆にて塗り、鉢の内に、天照大神宮、八幡大菩薩、春日大明神と三行に彫り、下に房宗花押あり。又た一方には天文六年丁酉三月とあり、其間に般若心經全部を彫付けあつた。如何にもその時名の物らしい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

神社附近の大塚の陪塚から掘り出したる、金銀鐶、曲玉、管玉、切籠玉、小玉、鐵簇等を見た。何れも古墳時代のもの。曲玉は瑪瑙らしく、切籠玉には水晶等もあつた。然も塚中より出たと稱する小形の鏡二面は、勿論和鏡にして、古墳時代とは、頗る時代の相違がある。此れは塚より掘り出したとすれば、後から混入したものであらう。尙ほ漢鏡の破片が、木に附著して、木も鏡も共に朽ちてゐる數片を見た。樂浪時代の木棺發掘せられたる今日、古墳時代の木は、左程珍とするにも足らぬが、亦た珍ならずとしない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

中山翁は大塚を以て、寒川神社の神様と、何等の因緣あるものと考へてゐる。左もある可し。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此の大塚は大神塚、若しくは應神塚と呼ばれ、塚上には大日如來の石像がある。其の蓮華座に、

大塚　山安樂寺成就院、開傳相州一宮寒川大明神神碑、先生之御廟窟也。天和二年壬戌十月廿一日法印善榮造レ之。

と彫り附けてある。本來寒川神社は、八幡宮であるとの說があつたから、斯く應神塚と稱したのであらう。何れにしても此の大塚は、此の地方の最大有力者の墳にして、其の陪塚は何れもその臣屬のもの丶墳であらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此の附近には並塚と唱へ、大小十餘の古墳がある。或は十三塚とも云ふ。菅谷原の古戰場は、此處にある。此れは山内扇谷兩上杉の鎬を削つた地だ。寒川驛にて再び上車。此れから倉見驛、社家驛を過ぎ、厚木驛にて下車。厚木驛と云ふも、實は海老名村河原だ。我等は道なき道を尋ね田の畦を辿り、相模川を渡りて、厚木の町に出でた。今や小田原急電は工事最中にて、架橋も略ぼ落成してゐる。

＊　＊　＊

厚木にて牧野君待受け、自動車にて、小鮎川、中津川を渡りて、一路依知村に向うた。而して朝來の雨雲は散じ盡くして、全く小春の好天氣となつた。

四　依知村から高峰村

依知村は、近江愛知郡に住居した依智秦氏の依知から出た名であらう。卽ち此邊は支那移住民の部落であつたらうと云ふ。何れにしても關東は朝鮮人、支那人の移住地にして、武藏、相模には、其の地名が、歷々之を證す可きものがある。而して此邊古墳の多い情態より見るも、何となく歸化人種の移住地らしく思はる。

＊　＊　＊

我等は先づ下依知字金田の妙純寺に詣した。此處は本間六郎左衞門重連の邸で、日蓮上人が、龍の口の難を免れ、佐渡へ流罪の途次、此邸に宿つた。同夜上人、明月天子に向て、法問を試みた、忽ち大星光芒を引いて、庭中の梅樹に下り、化益を助けた。重連深く上人に歸依し、邸を捨て、寺としたと云ふ。今尙ほ本間櫻と云ふ老木がある。佐渡は云ふ迄もなく、本間氏の所領であつた。此所の住職脇田堯淳師は、今や本門寺貫主として不在だ。

＊　＊　＊

併し此の傳説は、中依知の蓮生寺、上依知の妙傳寺にもあれば、何れとも云ひ難し。而して其の傳説の何れもが、固より保證の限りでない。但だ此寺が本間氏に由緒あるだけは、間違あるまい。見るものは、唯だ老松の天半に舞うてゐる姿だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此れより建德寺に赴く、此れは禪宗で、本間氏の菩提寺だ。其の庭も一寸幽邃だ。而して松竹の幽徑を過ぎ、中津川に臨める懸崖の上に、墓地がある。その一圍ひの域内に、二十八基の寶篋印塔が列んでゐる。何れも一尺から二尺迄の小形にて、本間氏歷代の墳墓であると云ふ。如何にも苔蒸して、時代がついてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此れから金田神社に詣した。社は荒廢してゐるが、二十間以上もあらんと思はる數株の松と、大なる槇樹がある。何神を祠つてある乎。唯だ一拜して去つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此れから古墳の群集したる間を、疾驅して三增に向うた。彌望桑畑であるが、其の中に累々として土饅頭がある。從來之に手を著くれば祟を爲すとて、その爲め鋤犁の侵蝕を免れた。然も今や迷信の時代去つたから、追々と崩壞して、痕跡を留めぬことになるであらう。現に先頃も數個掘り夷げたが、その中から石棺とか、棺中から凡有る副葬品が出でたと云ふ。然も何れも其の行衞は、杳として知り難しと聞く。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

斯くて我等は下川入村、中津村を經、高峰小學校に著した。此邊は桑苗の產地と云ふ。中津村では、小學校の運動會にやあらん、桑畑の間を、衣飾りたる女生徒等が隊をなして來りつゝあつた。

五　三增峠と三增合戰

我等は高峰小學校にて、携へ來つたサンドウィッチを飽喫し、先づ腹を作り、それから校長高橋君、及び三增の後藤君を案内者として、三增峠に向うた。途中にて其の門内にダリヤや、コスモスの咲き亂れたる池田氏を訪ひ、其の採拾したる石器や、土器等を觀。更らに同氏を案内者として、附近の丘上の山王小祠堂内にある板碑を見た。此れは上に彌陀三尊を刻し、正平四年二月十五日と明瞭に讀まれた。其の時代から云へば、正平以前のものもあるが、板碑に南朝の年號を見出すは、有り難く覺えた。別に正平十の三字までは讀れるが、その下は缺たる破片もあつた。

＊　＊　＊　＊

それから竹藪や、桑畑やの間を通り抜くれば、杉林に入る。此處は既に三增峠の古戰場だ。其の邊に甲斐の將淺利右馬助信種の墓がある。面に淺利墓所とある。裏に曾雌知義記レ之、とある。知義は牧野備前守成春の家臣で、元祿十三年再建したものと云ふ。

＊　＊　＊　＊

此れから中峠に向つて上つた。秋陽がキラ〳〵と松や杉の間を漏り、而して其の幽徑の左右には、双葉萩の紫花が咲きこぼれ、如何にも清々しき氣持であつた。

＊　＊　＊　＊

中峠の頂上には、信玄の旗立松がある筈だと、中山翁が云うたが、何時の間にや燒失してゐた。それは其の老松の洞中に、獵師が貂を追籠み、此れを捉へん爲め、火を洞中に放つたところ、遂ひに其の木を燒き盡すに至つた。而してその獵師も、後に自殺したと云ふことを、後藤君が物語つた。

＊　＊　＊　＊　＊

三增合戰の要領は、左の通りだ。

北條氏康は、武田信玄が、小田原を引退くと聞て、中路にて討留む可しとて、北條陸奥守氏照、同安房守氏邦、同上總介綱成等、却て二萬餘騎（兵數に懸直あるべし）三增峠及び志田山邊に陣を舖て、甲州の通路を取切つた。信玄當所へ推來るに及で、北條衆一旦半原山に陣を退く。甲兵山を越ゆるに至て、兵を進め、合戰に及ふ。甲州方淺利右馬助信種は、三增峠の往還に係り、信玄は其左の方山上に押上げ、馬場美濃守信房、四郎勝頼は、深堀澤と志田澤の上なる山を、岨傳ひに、韮尾根（今二郎根と云ふ）に出、それより引返し、志田澤に下り、北條勢の後を討つこととした。

＊　＊　＊　＊　＊

合戰始まりて武田方士大將淺利信種討死し、北條勢勝に乘、彌〻競ひ戰ふ所、美濃守信房、四郎勝頼等、横鎗を入れ、又た後勢山縣昌景等、後面を討に及び、北條勢敗北して田代山、半原山等に遁れた。北條氏康父子は、二萬餘人を率ゐて萩野迄出馬したが、先手敗軍と聞て、直ちに馬を返した。

＊　＊　＊　＊　＊

信玄は北條衆若干を討取、反畠に退き、凱歌を執行ひ、甲州に歸陣した。（甲陽軍鑑、小田原記）

＊　＊　＊　＊　＊

此の戰爭は北條勢が、武田勢を前後より挾擊して、其の退路を絶たんとしたが、却て武田勢の爲めに、挾擊せられて敗北した。

＊　＊　＊　＊　＊

北條は關八州に雄を稱へたが、その相手は、兩上杉や、里見の類にして、とても謙信や、信玄には、武を以て爭ふ譯には參らなかつた。

六　飯山より平塚

此れから愛川村田代に至り、縣會議員大矢武兵衛氏の邸にて、馳走を受け、其の酒庫などを見た。君の家は酒や醤油の醸造をなし、酒も千石以上を造ると云ふ。我等に酒の土産を贈らんとの厚意だけを受けて、辭し去つた。邸は中津川の畔にありて、瀟洒愛す可き趣があつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

此れから平山橋を渡り、萩野を過ぎ、小鮎村飯山に赴いた。飯山は小鮎川を帶びてゐる。その川畔の龍藏神社には、石棺の露出したものがあり、その蓋を開けば、骸骨が入つてゐる。棺は桝形のくり抜きであつた。以て珍とす可しだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

最早暮色山村を籠めつゝある。我等は數百級の石段を上りて、飯山寺觀音に詣した。此處も十二年震災の痕跡が、尙ほ殘りてゐる。龜甲松と云ふ大松があり、大さ十圍餘の老樟がある。又た嘉吉二年壬戌卯月五日大工大和權守淸原國光の銘ある古鐘がある。參道の側には、文明六甲午卯月日願主小比丘恩隆の銘ある石地藏がある。此處は坂東六番の札所だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

飯山は毛利庄の中にして、嘉祿の頃には、毛利藏人季光入道西阿の所領であつたと、淨土傳登錄には見えてゐる。云ふ迄もなく、其父大江廣元入道覺阿の所領を、相續したのだ。されば今日の毛利公爵家に取りては、發祥の地である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

飯山は又た冶工の本場の一だ。神奈川宿洲崎明神社の鐘銘に、應安元年戊申九月十一日冶匠相州飯山源光弘の名が銘刻せられてゐる。（新撰相模風土記）又

た天正十七年には、小田原籠城の準備として當所の鍛工に、大筒を作らしめた古文書がある。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等は觀音堂を下り、飯山の辻に出で、累々たる古墳を左右に眺め、尼寺原を過ぎ、厚木町に出で、相模川に沿うて下り、中郡に入り、一氣に平塚町に著したのは、上り汽車五時四十四分發車前十分。

＊　＊　＊　＊

如何なる掌大の地にも、それ〴〵歴史がある。我等は日曜一日を、愉快に暮し得たるのみならず、亦た有益に暮し得た。此れは主として嚮導者たる中山毎吉翁の博該なる鄕土的知識に負ふ所である。

（大正十五年十月）

川和の觀菊

一　大菊　中菊　小菊

一年廻り來りて、菊花の好時節となつた。何人も菊を好まぬものはあるまい。要は唯だ其の程度如何のみ。武藏都筑郡の川和なる中山氏は、百年以來、養菊を以て、天下に鳴つてゐる。本年は偶然にも、横濱なる中山毎吉翁の案内にて、一遊を得た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

十一月十一日、昨夜來の雨は、未だ止まず。然も予は約を重んじて、早朝東神奈川に出掛け、此處にて中山翁と相會し、八王子鐵道にて中山驛に下車した。川和は此れから十七町、鶴見川の上流に在る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

雨中ながらも殘秋田家の光景は、轉た愛す可きだ。柿葉は殆んど落盡して、朱殷なる柿實は累々として、花の如く枝に滿ちてゐる。田は殆んど刈られて、處々に稻束が積んである。籬の菊、塘の嫁菜の花、茅家を繞る櫟、楢の黃葉、何れか詩料たらざる可き。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

川和の菊花王中山恒三郎氏の吳服、其他小賣的店鋪は、街道の兩側に副うて駢び立つてゐる。此の街道は、神奈川より日野に達する縣道だ。而して其の本家は街道の上なる岡阜の中腹を占めてゐる。孟宗竹や、大なる槻などの中を貫きたる道を上り行けば、突き當つて廣き庭に出づ。而して此處に大なる土藏や、番頭手代の居並ぶ所や、又た時代的茅葺の住宅がある。而して其の庭苑を劃して、多くの菊花壇は設けられてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等は何よりも此の古風なる住宅が氣に入つた。如何にも堂々たる日本の地方紳士の居所だ。今日山村水郭、隨處に似て非なる文化式住宅なるものが、流行する中に、斯も昔ながらの典型を存するは、何よりも喜ばしく存ずる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等は主人中山恒三郎君から案内せられ、その花壇を見た。花は大菊、中菊、小菊の三種に別れてゐる。本年は季節が咿か後れたれば、大菊も未だ咲き全からず、中菊も未だ狂ひ初めず。併し先づ七分通りにて、見頃と云へば、見頃であつた。殊に小菊の懸崖作りなどは、如何にも立派であつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等の如き素人には、主人が餘りに目を懸けない野菊などの、咲き溢れたる風情が、一段と幽趣を覺えた。併し本園の主力は、恐らくは中菊に存するであらう。

如何にも正々堂々として、威風四隣を壓するものがあつた。

二　菊の三品

中山氏の菊は、歴史的にも由緒がある。文政十年、現代恒三郎君の祖父の時、江戸小石川なる松浦某氏より、秋菊苗廿五種を讓受け、爾來家業の餘力をもて、培養に勗め、嘉永年間には、三百種を得、今日に至りては、自園より作出したる新種を合すれば、無慮三千種に達す可く。而して明治廿二年より大正十四年迄、秋香會にて、中菊の一等に入選したる十九種中、中山氏實に其の七種を占めた。

＊　＊　＊

斯くて明治十四年には宮内省に、菊苗十三種を献じ、明治二十五年以來、有栖川、閑院、久邇、北白川宮等の各殿下の台覽あり。而して明治四十三年には、『菊の香』と題する、菊花譜としては、殆んど空前の大著を出し、乙夜の覽に供してゐる。

＊　＊　＊

現代主人恒三郎君、亦た父祖の志を紹ぎ、明治三十七年以來、秋香會の中菊部長として、又た大正四年以來、秋香會副會長として、斯界に於ける權威者の一人である。

＊　＊　＊

我等は庭上の花壇を見、更らに庭石を傳うて、阪を上り、丘上に出で、亭子の裡に立て眺むれば、如何にも主人の清福が、羨しさを覺えた。山は城山と稱して、古城跡だ。何れも老松の間に、楢、櫟、或は槻、楓など交り。而して山麓より山腹にかけて、孟宗竹の林が蔓延し、然も眼下には、田圃、林樹、茅舍の點々散在する、鶴見川上流の平野が展開し。その先には遙かに阿夫利山や、丹澤山を見、更らに其先には富士山が見えると云ふ——當日富士は雨雲中に沒してゐた——而

して菊花壇は、庭中より溢れて、此の崖上にも、幾個となく連つてゐた。此の田圃は五百石、二代將軍秀忠の御臺所、崇嚴院夫人の化裝料にて、夫人沒後は、その增上寺に於ける御靈屋料となつたもので、川和は德川氏とは、特別の關係あつたと云ふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

凡そ日本の勢力が、世界に波及したる一は、浮世繪と菊であらう。而して二者中にて、菊は尤も世界に普及してゐる。而して大菊の如きは、今日往々逆輸入の傾向がある。但だ中菊に至りては、日本固有の特色にして、故水本樹堂（成美）が菊を品して、仙花、俗花、奇花、怪花、正花の五種に分ち、而して中菊を以て、正花の本體となしたるの、未だ必らずしも好む所に阿るものでないことが判知る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

所謂る正花とは、平瓣、匙瓣、管瓣と稱する、三種の花瓣を具備する中菊が、一定の規則に當て篏りて、變化するものを稱すとは、水本翁の說にして。それ以上はとても專門家ならざれば、知る能はず。又た知りても、知らざるも、大なる損得はあるまいかと思はるゝ。

三　舊家と喬木

雨も漸く止んだ。我等は松林園にて午餐の馳走に預つた。此れから近傍の松蓮寺を見た。康永三年十二月と、貞治五年二月の板碑があつた。尙ほ今一つ小なる板碑があつたが、其の年代は不明だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此れから八幡神社に詣した。此處にも亦た、長祿年間の板碑があつた。されど尤も悅ぶ可きは、四五株の老杉が社內に聳立し。中にも其の尤なるは、目通二十八

尺、高二十三間、樹齢は一千年と云ふ。而して其の枝は繁茂して、周邊に垂れ、且つ張り出してゐる。而して其の幹には櫻の寄生木あり、花時には能く花を著くるさうだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

中山君と共に我等を案内せられたる長崎君は、此の地方の舊家にして、其の祖先は長崎遠江守と云ひ、其の此地に在る約六百五十年と云ふ。吾人は決して進取、革新を忘れてはならない。されど國家の强味は其の歴史に存する。舊家や喬木は何れも愛護す可きもの。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

凡そ物の愉快は、半可通の所にある。眞の專門家になれば、それに優したるものはないが、人間は總ての事に專門家となる事は勿論、專門的知識を具備することは容易でない。併し素人には素人の樂みあるのみならず、却て素人なるが爲めに、淡泊にして味ある樂が出で來る。人は笊碁と冷笑するも、世に笊碁の連中程、碁を愛する者はなく、碁を樂しむ者はない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

予は尙ほ中山君に、菊の話を聞きたかつたが、餘り深入りしては、却て興味が減ずるを虞れて、大抵にして置いた。而して重ねて歸るに際し、庭の花壇を一巡した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等は中山母堂―七十七歳―を始め、一家の人々と別れ、明年の秋を約して去つた。而して主人公中山恒三郎君は、我等を自動車にて、東神奈川驛迄、送り屆られた。此處にて主人公、及び横濱なる中山每吉翁と相別れた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

水戸の歴史家安積淡泊先生は、德川時代に於ける史家の巨擘だ。而して先生は又

た養菊の大家であつた。先生は其の史筆よりも、寧ろ養菊を以て誇りとせられた。先生曰く、『吾百事不能。而して唯知レ養レ菊。培殖三十年。頗能得二其要領一』と。予の如きは史筆は勿論、養菊に於ても、殆んど先生と較物にはならない。但だ菊を愛するの一事に於ては、或は先生に愧る所なきに庶幾らん歟。

（大正十五年十一月）

看梅漫行

一　杉田から金澤

山王草堂の梅も、殆んど半は發いた。定めて杉田の梅花も妙ならんと、十四日の日曜、孤筇飄然として出掛けた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

横濱から杉田東漸寺の門前迄、既に電車が通じてゐる。東漸寺の梅は、蕾が尚ほ固い、眼に著くものは本堂前の巨杉だ。此れは北條氏の軍配の際に、其の幹頭に旗を掲げたものと云ふ。果して然るや否やを知らぬが、兎に角數百年の物だ。轉じて妙法寺に至れば、此處の梅も、恐らく滿開は、三月初旬乃至中旬らしく思はれた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

雪中菴蓼太の杉田に於ける句に、『梅が香に腹ふくるゝや帆かけ船』とあるが。とてもそれ程の梅香を喫する譯には參らない。餘儀なく寺の背後の小高き丘上の神松―松は既に枯れて株のみ存す―の側に荆を班いて、携へたる菓物を喫し、沖の景色を眺めた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

それから山徑を過ぎて、金澤街道に出んとしたが、街道は眼前に在り、通行車馬

の響きさへも耳に入りつゝ、竹藪から懸崖にて、とても往かれない。如何にせんと案じたが、何やら此の山徑も、金澤に行く道らしく思はれたから、孤筇に任せ、得々と歩した。天空は時に晴、時に陰、然も氣候は溫和で、仲春の頃の如く、春霞はたなびき、南向傾斜面の暖陽逗る所には、野梅が點々開いてゐる。山徑は且つ上り、且つ下る。或は松山、或は雜木山、或は竹藪、時としては山を開墾しつゝあり、時としては木を伐りつゝあり、八田知紀翁は『踏み迷ひてぞ、花は見る可き』と云うたが、如何にも愉快なる散歩であつた。

綿蠻鳥語交樵歌。　松逕行過又竹坡。
迂路彷徨君莫笑。　孤筇到處野梅多。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

斯くて端なく能見堂に至つた。今は堂は愚ろか、其の能見堂の標石―享和二年のもの―さへも、前年の地震に顚倒したまゝだ。而して巨勢金岡の擲筆松も、今は只だ枯株を剩すのみ。但だ其眺めだけは、舊に仍りて佳。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

能見堂には、明治十三年の夏、來觀したるやに覺ゆ、爾來屢ば金澤に遊んだが、其の峻坂に辟易して、再遊を果さなかつた。然るに今日偶然此に至つたのは、何等の仕合であらう。

二　金澤より鎌倉

杉田を發したのが、九時頃、能見堂から稱名寺に至れば、既に正午、稱名寺では仁王門の前から、本堂の邊の梅花は既に六七分だ。但だ昔の西湖梅は、今や其跡もない。予は携へたるサンドウィッチを、鐘樓の礎石に腰掛けて頬張りつゝ、此の幽境に、思掛けなく禪心を澄した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

偶ま仁王門の側から、數多の會社員らしき新人等が出で來つた。此れは宮であらう乎、寺であらう乎などと、頻りに評定してゐた。予は説明してやりたいと思はぬでもなかつたが、其儘彼等は何處ともなく立ち去つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

金澤は幾回來ても、佳景である。但だ埋築やら、建築やら、近世文明の侵蝕で、追々と其の天然美を損毀するは是非もない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此れから故らに朝比奈切通を歩して鎌倉に出でた。野梅は此邊にも多くある。竹外の横枝、茅舍の老木、何れも風趣饒かり。今や伐木の時節とて、小兒も婦女も、其の背上には、大かさなる柴や、薪を負うて來る者に逢うた、又た牛車や馬力の薪を運ぶにも逢うた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

餘りに汗ばみて、途中の鼻缺地藏に作禮するさへ打忘れた。切通の峠は、地震當座其儘である。兩側から疊一枚もある巨巖や、小山の如き土塊が顛び落ちて道を塞ぎ、其上を人も、牛も、馬も越えて行くのだ。仰ぎ見れば、頭上には欹ち落ちんとしつゝある巨巖が、途中に引き掛つてゐる。危險と云へば危險だ。面白いと云へば面白い。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

淨明寺畔の松澤敬讓君を訪ひ、清茶一碗、大いに元氣を恢復した。松澤君は此邊の草分にて、自ら古狸だと云うてゐた。今は既に文化村の眞中だ。偶ま小泉三申君の別墅前を通つたから、其の不在を知りつゝ、名刺を投じて過ぎた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

予は金澤から鎌倉に通ずる道が、縣道か、郡道かを詳にしない。されど朝比奈

切通の阪路さへ、修理すれば、自動車を通ずるに、差支ない。金澤からも、鎌倉からも、切通さへ無くば、今の儘でも、自動車が通ぜらるゝ、而して此の切通を修理するは、決して難工事ではない。斯くすれば鎌倉、金澤、逗子は、互ひに三角形の一片となりて、何れからでも交通が出來、三所の住者は勿論、普通遊覽者に取りても、無上の便利であらう。金澤逗子の間もさることながら、金澤、鎌倉の間も、中々捨てられぬ佳趣がある。然も唯だ朝比奈切通の修理にて、自動車往來の便が開くるとせば、何を苦しんで之を閑却するや。いと不審し。

＊　＊　＊　＊

名園や、名勝の花見もさることながら、山複水重の山路を、歩行しつゝ、隨處の花を眺むるは、亦た一入の風情がある。

＊　＊　＊　＊

實は長谷に大塊翁を訪はんとしたるも、聊か疲勞を覺えたれば、その儘山王艸堂に還つた。古人の所謂る『春在枝頭已十分』の笑を免るゝ能はざるは、致方がない。

（大正十五年二月）

吉野觀梅

一二　俣尾

大正十五年三月十四日、高橋君を案内者として、青梅在吉野村に觀梅に赴く。雨ならば中止と約束したが、夜來雨あり、曉に至りてやゝ息みたれば、傘を携へて新宿停車場に至る。高橋君先在焉。

＊　＊　＊　＊

立川に至れば青梅から齋藤君、及び吾社の小出君出迎へてゐた。此れから青鐵電

車にて、拜島、羽村を經て青梅に至つた。羽村では大正十三年八月、亡兒萬熊と鮎漁に赴いた當時を思ひ起した。天氣は意外にも、梅見日和と云はんよりも、寧ろ櫻見日和となつた。とても薄き外套さへも、著くるに懶かつた。

＊　＊　＊　＊　＊

青梅にて下車する筈であつたが、青鐵支配人今野君等の案内にて、其の終點二俣尾に至つた。二俣尾は玉川流域の漸く縮まる所で、其の街道は、武州より甲州に通ずる裏道の要衝だ。卽ち左すれば大菩薩峠を經て甲府に至り、右すれば小曾木村、成木村を經て、秩父大宮に達す。當所は平將門の後裔三田氏の居城にして、永祿六年三田綱秀は、北條氏康に攻められ、落城の後、岩槻に逃れ、七十四歳にて生害したとの歴史がある。

＊　＊　＊　＊　＊

我等は先づ海禪寺に赴いた。此處には珍らしき位牌がある。其の表面には、『將門平親王朝臣代々尊靈』と記し、其の裏面には、寛永四年八月吉日野口刑部少輔秀房松月題として、親王の輿を立たのは、山中棚澤である、故に其處に宮を立て、先代より敬禮す。三田の祖先七十四代恙なく、永祿六年禪正少弼綱秀死して、滅亡す。其の遺臣野口のみ生存して、今や八十九歳に及ぶ。仍りて靈牌を作りて、三田氏の菩提所に納むとの文句がある。此れは三基作りて、他の二は青梅の金剛寺、根加布村の天寧寺に藏めたと云ふ。

＊　＊　＊　＊　＊

尙ほ當地の舊家谷合氏の藏したる、上杉顯定の三田彈正忠に與へたる書簡、及び天正廿年の豐臣秀次京大阪より名護屋(九州)に至る人馬、及び舟次に關する文書を見、又た當寺に藏する天正三年勅願書、同天正十三年德光禪師號特賜の綸旨を拜見す。

＊　＊　＊　＊　＊

茲に特記す可き一事あり、我等が電車を下るの際、齋藤君の座右に措きたる小包が紛失した。此れは氷川村日原神明社の所藏の鰐口にて、我等に示す可く、特に携へて來りたるもの、餘りの不思議に、扨は車中に狼藉したる醉客の一群であらうと、追踪したるに、果して然りで、漸く取り戻した。彼等も惡意あつての事ではあるまい。醉に紛れて、自他の區別を忘れたのであらう。此の鰐口には、

武州柚保野上郷藏澤村

神渟(明)宮鰐口

文安二年十二月十日　敬白

旦那　　法性

とある。兎も角も取り戻したのは、神明の加護であらう。

二　澤井及吉野村

海禪寺の山門からの眺めは、玉川の流域と、甲武諸山を見て面白い。それから玉川に沿うて溯り澤井に至り、青鐵社長小澤氏の邸に小憩した。小澤氏は武田氏の一黨で、其の先代は信玄の父信虎と衝突し、山を越えて、此地に來住したと云ふ。其の居邸は、二百四五十年前の物にて、茅屋根の上には千木を据ゑ、儼然として土豪の趣を剩してゐる。路を挾んで別邸あり、更らに下りて川流に枕する小亭あり。亭上より見る、水底の石數ふ可し。而して其の向岸も亦た、小澤氏の所有と云ふ。老槻、雜木鬱然として川に映ず。盛夏の涼味、晩秋の霜色、兩ら想ふ可し。

＊　＊　＊　＊　＊

吉野觀梅

澤井は澤井丸太の本場だ。而して此の附近の諸山、整然たる植林の狀、實に見るも心地好し。小澤氏は祖先より材木の筏下しを主宰し、其の租を納む。先代太平翁は一鄕の利用厚生に努力し、藍綬褒章を賜はつたと云ふ。所謂る故國は喬木あるの云にあらず。斯る舊家は、國家の紐組とも云ふ可きもの。子孫希くは守りて失ふ勿れ。

＊　＊　＊

我等は流域を溯りて鳩の巢に至り、踵を回らして新高橋を渡り、東京府の養魚池に、虹鱒の繁殖を見、卽淸寺に至りて、吉野村前村長野村君、現村長久保君等の案内にて蕎麥の馳走に預り、それより梅林を見た。

＊　＊　＊

卽淸寺は、密宗の大德印融の棲隱地だ。其著『杣保隱遁抄』は、此處にて出來つた。其の第九卷の末には、

永正十一年甲戌十一月上旬之候同十三年丙子三月下旬之候爲ニ松壽丸之學文一書寫了

印融滿八十二歲

とある。印融は永正十六年八月中旬、八十五歲にて武州烏山三會寺にて逝いたから、其の示寂の三年前までは、此處に居たのであらう。

＊　＊　＊

彼は武州久保の生れにて、高野山に上り、無量光院に主となり、晩年東武に還りて、大いに化を行うた。彼は性讀書を好み、外請に赴くには、必らず小牛に駕して鞍に文卓を著け、行く誦し、且つ吟じたと云ふ。但だ今や卽淸寺も火災に罹りて、殆んど見る可き物も、徵す可き物もない。併し庭前の梅花は滿開であり、四圍の光景は、幽澹であり、それに手打蕎麥滿腹にて、神氣暢然となつた。

三　梅花村

此れから吉野村の觀梅となつた。野村君は月夜とか、清曉とか、其の最上の梅見時間を提示したが、當日は東京客の雜沓にて　梅花をして口あらしめば、五月蠅いなと云つたであらう。されど誰しも生命の洗濯に出掛けつゝあるもの、偕樂共娛の見地から云へば、先以て大慶であり、青梅電鐵抔から見れば、芽出度限りである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

梅には老木が、比較的多く、且つ數でこなすとも云ふ可き程、樹數も多かつた。其の上を柚木村と云ひ、其下を下村と云ふ。古は雪村、霜村と云うた由。梅花は下村一帶の丘陵に最も多くある。此れは四百年以前から、栽培したるものと云ふが。予が從來觀たる梅林中では、最も大なる一だ。但し山陽が『非レ觀二和州香世界一、此生何可レ說二梅花一』と云うた月瀨は、未だ見ざれば、比較は出來ない。

道入二川源一好景迎。　東風送レ暖一筇輕。
却嫌遊客攪二清興一。　故向二梅花少處一行。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

水崖山腹幾茅家。　香雪垂垂石逕斜。
村老不レ知清福饒。　百年生計在二梅花一。

併しとても梅花のみでは不足であらう。樹下には福壽草やら、樹邊には桑やら、其他の蔬菜類などもよゝ栽えてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此れから旭ケ岡の公園を經、青梅町に入り、金剛寺に至りて、永祿九年六月廿日

附、鉢形北條の古文書や、傳空海筆白不動明王や、其他德川家康以來の御朱印などを見。而して庭前の所謂る青梅町名の出所である梅樹を見。廣々としたる青梅町を、悠然散歩して、青鐵本社の屋上庭園に至り。清茶を喫しつゝ、四邊の光景を展望した。

＊　＊　＊　＊　＊

青梅の物資は、青梅縞、材木、薪炭、石灰石、砂利の類であらう。青鐵の如きは、人間よりも寧ろ石灰石や、砂利を以て、より大なる得意としてゐる樣だ。追ては御嶽の麓迄も延長す可しと云ふ。今回は惜らくは御嶽や、氷川の勝を探るの暇なかつた。

＊　＊　＊　＊　＊

此行青鐵社長小澤君、同支配人今野君、前町長小林君、西多摩郡書記吉野君、勝沼神社神官齋藤君、吾社出張所の小出君、相共に周旋した。又た吉野村村長久保君、前村長野村君、青梅町長根岸君を煩はした。且つ久し振りにて、井上活泉君と相見たるは、如何にも快活であつた。而して郡長奥田君亦た拙著の愛讀者であり、少からざる好意を受けた。

＊　＊　＊　＊　＊

午前六時家を出で、午後七時家に還つた。大森停車場を出れば、雨は又た少しく降り出した。此行高橋君の案内に負ふ所、最も多かつた。予は君を稱して歸化多摩人と云うた。それ程君はこの地方の地理や、歴史に通曉してゐた。

（大正十五年三月）

青梅小遊記

一　吉野村觀梅

昨年は三月中旬に、玉川の上流、吉野村の梅を觀た。本年もと心掛けたが、延々となつて、三月二十七日（昭和二年）出掛けた。とても花には間に合はぬと斷念しつゝも、其の山水に誘はれて、且つは該地諸友との約束を履行する爲めに。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

山王草堂から、大森停車場迄、一疋の黑猫と、二疋の赤犬と、一人の牛乳屋、一人の新聞配達者に出會したばかりだ。天氣模樣の定らざる、日曜の早曉なれば、誰も出で行く人はない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

新宿にて高橋君と出會した。又た青梅鐵道社長の小澤君、同支配人の今野君も、偶然（？）同行することとなつた。車窓から日の光が拜まれた。今日は最好天氣ならざる迄も、先づ好天氣に相違あるまい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

青梅町に著するや、否や、根岸町長、小澤助役、小林保勝會長、藤井農林學校教諭、兒玉水源林事務所長、齋藤君、井上翁、小出君など相伴うて、直ちに登山した。我等は雨後の阪路を上りて、東京府立農林學校演習林を過ぎ、三月山に上つた。山上には小亭あり、其の中央に盛んに榾火を焚きつゝある。我等は火に溫まり、茶を喫して、展望の快を恣にした。北風は面を吹けども、春光は既に眼界に滿ちてゐる。殘雪は各山の頂から、七八合目に斑々たれども、淡靄は既に生色を催してゐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此れから嶺傳ひに秋葉山を過ぎ、扇松の舊地を徑し、金比羅山にて、亦た茶を喫しつゝ、飽かぬ眺に耽つた。山を下り、小澤、今野、兒玉、齋藤、小出の諸君と相伴うて、萬年橋を渡り、吉野村に赴いた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

青梅は當日市日なれば、市街は何となく活氣があつた。青梅織は、夜具蒲團地として、今最も信用を遠近に博して居ると云ふ。流石に青梅の名に負かず、街路に梅花多し。土地の人には兎も角も、外來の者には、一寸快感を與へる。

＊　＊　＊　＊　＊

吉野村の入口にて、野村前村長、久保村長と出會し、兩君の案内にて、梅林を逍遙した。意外にも若樹は半開、中老木は三分一開、老木は四分一開にも及ばぬ。花の見頃は、恐らくは四月上旬であらう。本年は珍らしくも、梅と櫻が同時に咲くと云ふ氣候らしい。落英を地下に蹈まんと心配したる我等は、固き蕾を枝上に仰ぎ見て、頗る奇異の感をなした。世の中に先見とか、豫想とか、前例とか、兎角當てにならぬ事は多い。

二　吉野から澤井

我等は野村前吉野村長の邸にて小憩した。君の家は屋を繞りて、皆な梅花と云ふ可く。而して屋後には、百年計畫にて、二百株の梅を植ゑてゐると云ふ。百年計畫とは餘りに長いと云へば、老木の見頃になるには、先づ百歳の樹齢を要するからと答へた。

＊　＊　＊　＊　＊

されど實の取れるのは、二三十年から、五十年内外の間にて、其の多きは一樹にて二石の收穫ありと云ふ。一箱―二斗―三圓にしても、十箱三十圓となる譯だ。

＊　＊　＊　＊　＊

我等は野村君の邸にて、草餅の馳走に預り、進行係りの爲めに、催促せられ、其

の一半を新聞に包み携へ去つた。花より團子とは、能くも申した諺だ。六十五翁の饞口、今更ら面目次第もない。

＊　＊　＊　＊　＊

玉川右岸を溯り、高橋の釣橋を渡り、其の畔なる河鹿園の樓上から、玉川を俯瞰した。主人の需に應じて、其の諸書帖に、枕流漱石の四字を題した。陳腐の言葉ではあるが、如何にも、斯樓の光景に當て篏つてゐる。若し良緣あらば、水聲を聽いて、一夜を過したい。

＊　＊　＊　＊　＊

斯くて我等は、玉川の左岸を下り、澤井なる小澤君の對川閣に入つた。池の巨鯉さへも、已に我等と舊知である。庭の老梅、約二百齡。宛も光琳の畫その儘だ。其の老幹より腕を張り、其の腕より小枝を生じ、それに星の如く、點々花を著けてゐる。此處は吉野村より川上なれども、氣候は却て早い。蓋し北を防ぎ南を開き、東に面してゐるからであらう。

＊　＊　＊　＊　＊

小澤家は、銘酒澤の井の釀造元として、有名である。酒は下戸には禁物だ。されば小澤家も當日に限つて、牡丹餅を出された。此れは予が爲めばかりでなく、同行の高橋君が、牡丹餅宗の評判高き故と察せらる。小澤翁は、今日は拙家も宗旨を變へたと、大笑した。併し小澤翁は此から午餐を差し上ぐるから、餘りに多くは喫し給ふなと、お客樣に箝口令を布いた程であつた。

＊　＊　＊　＊　＊

果然我等は、ヤマメの珍膳に接した。ヤマメは、玉川の上流、此方から五六里も溯らねば捕れないと云ふ。其の大なるものは、尺に近い。予は往年岳麓青龍寺に養痾の際、附近の諸氏が、其の藏書畫鑑定の謝禮として、屢ば贈遺せられたことを想起した。此魚は氣品高尙にて、決して濁水に住まず、又た住む能はず。併し

し虻や蟲類を、水上に躍り出でゝ、捉食すると云へば、喰意地だけは相應に張つてゐるものであらう。

三　惣岳山に登るの記

午餐の箸を投ずるや、惣岳山に上り、青渭神社に參詣することゝなつた。青渭神社は、三田村の鄕社、大巳貴命を祀り、延喜式内の神社だ。惣岳とは附近の諸山を總管するの意味だ。一行登山者、小澤君、福田翁、小林君、宮野君、兒玉君、今野君、小出君、佐怒賀君、及び高橋君と、老妻及び予。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

山は海拔七百四十二米突。我等は小澤君の好意にて、竹輿に乘つた。林鶴梁は、江戸から此地に遊び、輿小にして膝を容るゝ能はずと、其の紀行文に書いたと云ふが、其の窮屈は勿論だ。道端鳥居の側に、二十八町と記してある。我等は此の二十八町を、竹輿に搖られて上つた。決して窮屈抔と云ふ義理ではない。輿を擔ふ諸君の勞に比すれば、勿體なき次第だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

途中の澗谷には、梅花が滿開だ。東坡の句に『的礫梅花草棘間』とあるが、全く其通りだ。我等は梅花を觀、鶯聲を聞き、そろ〳〵爪先上りに上る。やがて澗から分れて、杉山の中に入る。それから道は嶮しくなり、勾配は急になる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

處々道普請がしてある。これは先頃來、我等の登山を豫期しての事ならんと想へば、恐縮千萬だ。されど爾來降雪があり、屢ば折木の爲めに、徑が塞がれてゐる。我等暖國の者には雪害抔を、餘り知らなかつたが、今更ら杉や、松の枝と云はず、幹と云はず、無殘にも折り、且つ劈き、時として根拔きしつゝある狀を

見れば、風害よりも、水害よりも、却て大ではないかと思はるゝ程である。

＊　＊　＊　＊

上るに隨ひ、殘雪ありて、足は動もすれば滑らんとす。我等は中腹の午王なる老檜の下に憩ひ、巫子塚に上りて、建武の板碑を見、又た眞名井の清泉を掬して、燥腸を潤し、更らに老杉の欝蒼たる中を過ぎて、頂上の青渭神社の拜殿の前に至り、一拜し。其の周邊を徘徊した。北風浩々として、身も亦た吹き飛ばされんとした。

＊　＊　＊　＊

此に於て神社を辭して、山を下り、眞名井の附近から、左折して、小平なる芝生に團坐し、四邊の眺望を恣にした。此處は北を防ぎて、外套を脱する必要がある。當面の御嶽は、手を差し出せば、殆んど達するばかりだ。而して筑波から高尾まで關八州の平野は一眸の中にあり。而して玉川の蜿蜒として、山中より平野を貫き海に入るの狀、歴々として指紋を數ふるが如し。我等は此の登山に就ては、小澤君は固より、宮野社司の配意に負ふ所少くなかつた。

＊　＊　＊　＊

惣岳山の上下には、約四時間を要した。小澤君及び其の一家に別を告げ、青梅にて同行諸氏と別れた。小出君は送りて立川に至つた。

＊　＊　＊　＊

立川から品川までは、車中の雜沓、殆んど立往生であつた。歸家して晩餐の卓に就いたのは、既に九時に近かつた。然も梅花を觀、更に山水の清賞を專らにしたる。一日の所得としては、甚だ多きに過ぎた。但だ歸來猶ほ身體は輿上に搖かされつゝある心地した。然も遂ひに化して大天狗となり、御嶽に飛び去つた夢を見るまでには到らなかつた。

（昭和二年三月）

松陰先生から大塊居士まで

一　鎌倉瑞泉寺

今春鎌倉の二階堂なる瑞泉寺の松堂和尚、山王草堂を過訪して曰く、松陰先生の瑞泉寺に於ける遺跡を不朽にす可く、石を建てゝ、之を表示せんとす。希くは一臂の力を假し給へと。予は固より微力である。されど『吉田松陰』の著者として、義理にも辭退す可きでない。仍りて之を同好の石井積翠、阿部無佛等諸君と胥ひ謀り、牧野内府、小泉三申、其他鎌倉に縁故ある諸賢の援助を乞ひ、和尚の志を成さんと勗めつゝある。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

昭和二年七月十七日、同好相ひ約して鎌倉瑞泉寺に赴き、其の建碑の場所を撰定せんとす。積翠君を先達として、二條公、無佛君、荻野君、平福君、野口君等である。予は二十餘年前、曾て瑞泉寺に遊んだが、其の記憶も今や朧ろだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

鎌倉停車場から、我等は故らに舊式の馬車に乘つた。名所舊蹟の見物に、自動車にて飛び廻るは、餘りに殺風景だ。馬車にて徐ろに古道、幽徑を行く。それだけでも懷舊の詩情が湧き來る。二階堂なる鎌倉宮の鳥居前から、左折すれば、覺園寺、右折すれば瑞泉寺だ。我等は夏草の生ひ茂れる村道を、前世紀の幌馬車にて輾らせた。所謂る草色青青送二馬蹄一とは、這裡の光景であらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等は馬車を山門の前に待たしめ、幽篁の間なる磴道を踏んで本堂の前に至つた。あな笑止や、大正十二年九月一日の震災は、方丈も、開山堂も、其他一切の建物を破壞し去つた。今は假屋を設けて、國寶の夢窓國師像などを安置してゐるの

み。然も松堂和尚は、兀々として、舊物を收拾し、其の最善の努力を、恢復に努めてゐる。

＊　＊　＊　＊

我等は吉田松陰先先の爲めに、建碑の場所を撰定した。衆議何れも本堂に面した る、有加利樹の側こそ、至當であらうと一決した。

＊　＊　＊　＊

有加利樹は、濠洲產にて、元來寒氣に耐へ難きもの。日本でも長崎や、神戸には能く成長する。然るに此の鎌倉二階堂なる谷奥の瑞泉寺に、雲突くばかりに成長してゐる。予は信徒總代横山君と共に合抱したが、尙ほ幾許を剩した。惟ふに其の高さは二十間を超え、其の大さは一丈を過ぐるであらう。予は二十年前、此樹と相知た。今や其の恙なきを見て、轉た欣快の情に禁へない。

二　瑞泉寺と夢窓國師

瑞泉寺は夢窓國師の嘉曆二年に建立したるもの。夢窓は北條末期から足利初期に於ける、卽ち南北朝を通じての一人物であつた。彼は七朝國師と稱せられて、七朝の天皇から歸依を忝くした。南朝からも、北朝からも。而して特に尊氏兄弟の親信は、深厚であつた。

＊　＊　＊　＊

國師は恒に人を避けたが、人は雲霞の如く、彼のもとに來り集つた。國師は恒に淡泊を甘しとしたが、然も榮寵は期せずして彼の身に振りかゝつた。彼は其の氣品の崇高なるのみならず、其の容貌亦た秀美であつた。彼が朝廷に出入する毎に、宮媛の艶書は、法衣の兩袖を重からしめたと云ふ。然も彼は其の操行に於

て、何等の非難をも惹起しなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等は國寶たる彼の肖像を觀た。又た黄檗木菴師の賛ある肖像畫を見た。而して松堂和尚によりて、收拾せられた書畫幅、古文書、古抄、舊槧等を見た。別に目を驚かす程のものもなかつたが、然も夢窓國師の高野武藏守（師直）に與へたる、俗牘文書の如きは、史料としても、閑却す可きものでない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

又た松陰先生の竹院上人―瑞泉寺方丈―に、其の門人松浦松洞を紹介したる俗牘、及び松陰先生の詩稿、漢文などを、竹院上人の詩と、合せて標裝したる一幅があつた。此れは長持一棹に詰め籠まれたる文書が、鼠の巣となり、殆んどバラ〳〵となつて仕舞うたに拘らず、其の底にあつた爲めに、助かつたものを拾ひ上げたものと云ふ。實に少からぬ功德である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等は開山堂の跡を見、足利基氏、足利氏滿の木像に一瓣の香を献げ、又た水戸義公の寄附したる詩板を觀。轉じて辨天社なる貯清池を眺め、大なる孟宗竹の藪を過ぎ、夢窓國師の坐禪窟に入つた。此の巖窟に入らんとするや、二個の大なる蝙蝠が飛び出した。韓退之の詩に、黄昏到レ寺蝙蝠飛とあるが、寺と蝙蝠とは相性と見える。巖窟中に、窓が穿れてゐる。其明は幽かなるも、大字の禪書などは讀むに差支ない。此れが世に所謂る夢窓などであると、講釋したる人があつた。或は然らん歟。

三　竹院上人と松陰先生

抑も松陰先生と瑞泉寺とは、如何なる因緣あるかと云へば、瑞泉寺の竹院上人は

先生の伯父だ。卽ち先生の母堂兒玉氏の兄だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

今ま先生の年譜を按ずるに、

嘉永四年辛亥先生二十二歳。六月十三日、熊本藩宮部鼎藏等と共に、房相の海備を視察し、鎌倉を經て、竹院上人を瑞泉寺に訪ひ、二十二日江戸に歸る。

とある。當時の遊記は、長井雅樂に貸して亡失したと云ふ。如何にも惜しむべきことだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

宮部鼎藏は、熊本藩の兵學者にして勤王の士、其の母氏に孝なるを以て、藩より賞せらる。眞に忠孝兩全の士だ。

嘉永六年癸丑先生二十四歳。五月廿四日、江戸に入り、鳥山新三郎の家に投ず。明日鎌倉に遊び、竹院上人の禪寺に寓し、六月朔日、江戸に歸る。

九月十三日、竹院上人を、鎌倉に訪ひ、十五日江戸に歸る。此時正さに露艦を長崎に訪ひ、之に投じて外遊せんとした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

尙ほ松陰先生の癸丑遊歷日錄を讀めば、左の如き記事がある。

廿五日（嘉永六年五月）晴。鳥山家を發して、西窪に至り、長原武を訪ふ。（長原氏は長原孝太郎畵伯の父、先生と共に山鹿流の兵學を講じたる士）立談少時、去つて西し、品川、川崎、神奈川、保土ケ谷、戸塚を經、皆な代官齋藤嘉兵衞の管する所也。左折して瑞泉寺を訪ふ。行程十三里。上人方さに出でゝ門を掃ふ。相見て喜ぶ甚だし。終夜談論倦むを覺えず。……

＊　＊　＊　＊　＊　＊

前に掲げたる有加利樹は、門側にありて、恰も上人が箒を止めて、松陰先生を喜色滿面、笑つて相ひ迎へたる場所なれば。其處こそ先生の紀念建碑には、恰當な

らんとしたのだ。松陰先生靈あらば、其所を得たるに滿足せむ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

尙ほ先生の日錄中には、水戸義公の命を承けて著はされたる『新編鎌倉志』を讀んだことやら。廿九日には竹院上人や、長州からの遊歷僧惠純と共に、江島に遊んだることやら。又た惠純の韵に次して、

杖履飄飄到處休。　年來世事我無レ求。
今日天涯却悲喜。　三人說盡故鄕遊。

の詩を詠じたることが記してある。然も當時先生は決して世事我れ求むる無しではなかつた。正さに五洲を週遊して、世界的大政策を、我が大日本の爲めに、建立せんと志してゐた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

六月朔晴。來路を取り、江戸に入る。長原武の處を過ぎ、鳥山の家に寓す。夜已に初更。

とある。十三里の路を炎天にてくるのであるから、今日の鎌倉往來とは、同一視す可きではない。

四　徧界一覽亭

夢窓國師は、他の禪客に比して、更らに一層山水の癖があつた。國師は隨處に、自から山を築き、池を鑿ち、假山水を樂んだ。嵯峨の天龍寺、臨川寺の如き、今尙ほ國師の匠心獨造の潰躅が存してゐる。國師は此の如くして、『箇中人作ニ箇中遊ニ』をなした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

乃ち瑞泉寺の如きも、其の重なる誇りは、一覽亭であつた。一覽亭は、瑞泉寺の

裏山の上である。此れは假山水でなく、天然の結構によりて、國師が其の坐禪窟の上方に、登臨の亭子を營みたるものだ。

＊　＊　＊　＊　＊

一覽亭に就ては、當時建長寺に在つた元僧清拙和尚が、其記を作りてゐる。

相陽の東、紅葉谷有り、嶺を紆りて而して上る、一牛鳴地、錦屏山下に入る。流泉脈々たり。前の淨智夢窓石禪師、嵓を鑿ち、地を敞らかにし、瑞泉練若を創め、以て居る。

此の光景は、六百年を距てたる今日も、殆んど文字通りである。

＊　＊　＊　＊　＊

前峰後洞、巧みに造化を奪ふ。洞の西、略彴空に横ふ。風磴委蛇、盤回十八曲、絶頂に至る。翼然たる新亭、之を名けて徧界一覽と曰ふ。

此れが一覽亭の要領だ。

＊　＊　＊　＊　＊

却説松堂和尚は、お案内申さんと先立れたれども、荻野君は、前回既に登臨したから、今回は御免を被ると云ひ、無佛居士は、病餘なれば失敬すと云ひ、無病息災、義理にも上らねばならぬは、積翠、百穂、及び予のみであるが。平生人の爲めにするに勇なる百穂書伯は、何やら頻りに辭退の模様である。

＊　＊　＊　＊　＊

それぞれの申譯はあるも、其實は何れも此の日午の炎天に、十八曲の急阪を上ることに辟易したるものであらう。斯く申す予も、先づ其の仲間である。されば之を紅葉の節に讓りて、それ迄お預けとした。

＊　＊　＊　＊　＊

徧界一覽亭には、清拙和尚の記文の外、當時の高僧、善智識の方々を擧げて、殆んど寄題せざるものはない。義公の命にて製したる詩板を見れば、二百首内外も

ある。それには後人の作も加へてあるが。

＊　＊　＊

併し此の一覽亭は、足利時代に既に荒廢に歸した樣だ。梅花無盡藏にて漆桶萬里が、文明十八年、亭跡に登て詩を賦してゐる。

東驢素念別非レ鞭。　一覽亭西富士烟。
殘磴苔荒黃葉積。　蛛絲底有二國師禪一。

然も今尙ほ國師登臨の跡を留む。高人の深致、想ふ可き夫。

五　東慶寺と大塊居士

此れから瑞泉寺山門にて、松堂和尙と別れ、八幡宮の鳥居前から、巨袋坂を上り、建長寺前を過ぎ、東慶寺に赴いた。禪忠和尙は不在なれども、淨智寺朝比奈和尙が、代りて接待した。

＊　＊　＊

東慶寺は實に思ひ出多き所だ。宗演老漢の在世中には、其の訪問は、年中行事の一であつた。

＊　＊　＊

地震にて全滅に瀕したる東慶寺も、禪忠和尙等の盡力にて、復興した。實を云へば餘りに立派になり過ぎたる心地がする。

＊　＊　＊

磴道を上れば、門から庭にかけて、萩が一面に茂りてゐる。キリギリスが、其の叢に鳴いてゐる。我等は方丈に入りて、先づ淸水にて面を洗うた。此地風なきも、亦た自から凉しとは、斯る場合であらう。

＊　＊　＊

實は野田大塊居士の生前からの希望に任せ、東慶寺の裡山、宗演老漢の墓畔に、其の分骨の場所を撰定することとなつた。それに就ては無佛、積翠兩君が、固より其の重なる肝煎であつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

成程場所も善し、其の撰定の墓石尤も好し。その趣向は、巨大なる自然石を安置し、所謂る大塊の大塊たる所以を昭かにし。而して其側に墓碑を建つることとした。遺族の人々とも、固より合議の上の事である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

予は既に筑後なる居士の故郷に於ける墓表を撰し、且つ書した。過日居士の相續人俊作君の依囑に應じ、更らに此處に建つ可き墓表を撰し、且つ書した。惟ふに此の自然石の、愈よ安置せらるゝと同時に、此の墓表の石も建つこととなるであらう。予は大塊居士の靈が、其の何れにも滿足するを信ずる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

宗演老漢の墓畔には、大塊は石燈籠を寄進した、予は石香爐を寄進した。然るに今や居士亦た老漢と、其の墳墓を隣りにし、而して予亦た居士の墓表を撰し、且つ書す。惟ふに如何なる因緣ぞ。自から顧みて不可解である。然り不可解だ。

（因に云ふ、前年『宗演老漢』の一文を草したるや、老漢なる語は、演師に對して、不敬ではない乎との、抗議を寄せられたる方々もあつた。されど是れ禪家の慣用語にして、固より敬語である。）

六　東慶寺から老龍庵

淨智寺朝比奈和尚は、主人不在の爲めに、馳走が出來ぬと詫びながら、其實は珍らしき清齋を供した。先づ葛餅を平げ、それから荷葉飯、それから何、何、何も精進料理の凝りたるものばかり。最後にはトマトの皿も出で來つた。此れは宗演

老漢が、好物にて、苟も老漢の在る所、赴く所、トマトあらざるはなしと云ふ。乃ち我等も其の餘惠を享けたものだ。

＊　＊　＊

老漢の生前、毀譽相ひ半ばしたるも、兎も角も現代の佛教界に於ては、唯一人たらざる迄も、第一人の仲間の一人であるに相違ない。老漢去りて鎌倉も何となく、寂寞だ。嘆息此人去、蕭條徐泗空の感なきを得ず。

＊　＊　＊

予は馳走の後、所謂る北鎌倉停車場から、逗子に赴いた。鐵道省が圓覺寺山門の側に、停車場を新設したるは、如何にも機宜に適してゐる。此れは十年以前から必要であつた。而して今後愈よ必要だ。

＊　＊　＊

されど此れを夏期休暇の期間のみに限るは、遺憾である。願くは此の停車場を恒久的としたい。而して北鎌倉などと、新たなる名を附くれば、何も知らぬ旅人は、或は鎌倉のことと速了して、下車するの不幸を見ないとも限らぬ。寧ろ直截簡明に、圓覺寺前と改稱するが、適當であらうと云ふ說がある。此れも一應理由ありと認め、玆に記して當局者の參考に供す。

＊　＊　＊

山に赴けば、日本の人は、悉く山に在るかと思ふが、海に赴けば、日本の人は、亦た悉く海に在るかと思ふ。輕井澤や、箱根邊の繁昌を聞けば、鎌倉や、逗子は、空ら明きの樣だが、其實は中々以て然らずだ。我等は老龍庵が、地震以來閑却してある爲め、人間の住居して差支なき程度に、何とか修繕したいものと、それぞれ毀れたる壁を、壁紙もて張り附けたり、曲りたる敷居を直したり、それ〴〵炎熱地獄に入るの勇氣もて働いた。

＊　＊　＊

故洪水翁の書齋には、淋しくも宗演老漢の額が、依然として掲げてある。觀瀾亭に上れば、老漢や、大塊や、抑も亦た松方老公抔と、對坐清談の往事を懷ふ。人も變れば世も變る。變らぬものは、相模洋の波の色と、富嶽千古の白雪とのみだ。

（昭和二年七月）

鎌倉一日の閑遊

一　新居の閻魔堂

一日清福一日閑とは、能くも申した文句かな、四月十二日（昭和二年）荻野、鹿子木の兩君と相拉へ、鎌倉小泉氏の翠屏莊に遊んだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

去る八日の夕、麻布なる小泉氏柯蔭精舍の愛染明王に詣す可く、鹿子木博士を案内した。博士は近く獨逸に日本文化の精粹を、講述す可く赴かんとす。予が案内したるは、せめて其の資料の一斑にもとのつもりであつた。而して文殊菩薩の鎌倉翠屏莊に安置せられたるを聞き、更らに相伴ふことゝなつた。荻野君は日本國寶の神樣とも云ふ可き一人にて、其筋の權威者である。鹿子木博士案内と云ふも、予亦た幸便に乘せん爲めであつたのは、云ふ迄もない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

小雨の天氣豫報は、見事に裏切られて、季節には薄す寒さを覺えたが、漸く好天氣となつた。途中は全く花見の旅であつた。芳野、嵐山、固より結構ではあるが、無名の山腹や、丘陵に、山櫻の自然に咲き溢れたる風情は、亦た一入だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

鎌倉停車場から、小泉君の誘導にて、直ちに八幡前を過ぎ、小袋坂を下りて、其の南邊なる新居の閻魔堂に至つた。此れは元來由井が濱大鳥居の東南に在つた

が、此處に移つたのは、元祿の頃ならむ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

大正十二年九月一日の震災の爲め、本堂は頽倒し、閻魔樣其他の十王、何れも痛手を負ひ、首と胴と相離れ、頗る慘めの姿であつたが、賴ひに故淸野知事や、小泉君抔の肝煎にて、見事に一切復興した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

十王と申せども、鎌倉彫刻の眞相を具へたのは、閻魔大王、初江王、及び二體の俱生神であらう。寛文年間、閻魔大王の像を修補したる時、腹中から『建長二年出來、永正十七年再興、佛師下野法眼如圓、建長役人德順判、興瑚判』と記したる故紙を取り出したと云ふ。(新編相模國風土記)

＊　＊　＊　＊　＊　＊

然るに今回修補の際、初江王を解體したるに、料らずも右肩寄木の內部に、

建長三年大歲辛亥八月五日
願主　善勸房(花押)
佛師　幸　有(花押)
爲法界衆生平等利益
大檀那□阿□

の文字を發見し、又た胎內右肩、左胸、膝裏等にも、同時の筆と覺ゆる墨書の佛名や、梵字が、縱横に書いてあり。尙ほその外に、寛永十五年や、天和三年の修理銘札も納めてあつたと云ふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

今や一切修理を了して、寧ろ震災前よりも、却て勝れるかと思はる。堂外には春日がうら〳〵と照り、落花が雪の如くちら〳〵と散る。

二　鶴岡八幡と翠屏莊

再び小袋坂を戻り、裏門から鶴岡八幡宮に詣した。椿は翠葉の裡から、眞紅に咲いてゐる。楓は若葉を茁してゐる。櫻花は風なきに散りてゐる。鳩はころ〳〵と鳴いてゐる。鶴岡神社の正面から見渡せば、大銀杏の芽も、今や漸く展びんとしてゐる。見下せば、一帶の老松の參道から、由井が濱邊迄、實に春霞泳蕩の裡にある。

＊　＊　＊

秋岡宮司の案内にて、頃ろ國寶に指定せられた辨天像を拜した。此れは初めから裸體坐像にして、頃ろ新に衣裳を纏うたる由。從來幾重にも塗り立て、其の本相を失してゐたが、今度それを拂拭し去りたる爲め、實に端麗、莊嚴なる女神像を現出した。其の容顏四肢、鎌倉時代の貴女を見るが如き心地す。蓋し寫生であらう。政府當局の注文と云へば、致方ないが、之に衣裳を著けしめたのが、玉に瑕だ。

＊　＊　＊

其の坐像の裏に銘がある。

文永三年丙寅九月廿九日戊午

始造二立之一奉レ安二置舞樂院一

從五位下行左近衛將監中原朝臣光氏

とある。字體雄勁、鎌倉時代の面目躍如たり。

＊　＊　＊

我等は社務所にて、社寶若干を觀、辭して落花の巷を踏みつゝ、小泉君の翠屏莊に至つた。

＊　＊　＊

小泉君は凝り屋である。佛像に凝り、政治に凝り、圍碁に凝り、其他にも凝る所が多いであらう。乃ち建築の如きも、其一だ。

＊　＊　＊　＊　＊

其の建築たるや、古人の型に囚はれず、現代の樣式に倣はず。只だ匠心獨造、其意の適する所を主とす。云はゞ一種小泉式とでも云ふ可きものであらう。

＊　＊　＊　＊　＊

便利を主としたる乎、風雅を主としたる乎。恐らくは便利にして風雅に、風雅にして便利に、卽ち心身兩ながら住み氣持好きを以て、建築の目的としたるものであらう。而して其の廢物利用と云へば、語弊があるが、舊物新用に至りては、別に手眼を出してゐる。

＊　＊　＊　＊　＊

翠屏莊は、表は金澤街道に面し、門を入る一歩、近く田圃を隔てゝ、屏風山の翠松と相對す。其の田圃には青麥、黃菜、若しくは蓮花草が、自然に春色を姍うてゐる。而して其の田圃の外を貫く細流を挾んで、一帶の櫻樹は、殘花、新綠相錯りてゐる。永日春晝、苦茗一碗、殆んど門外塵世の百事を、閑却するに足る趣がある。

三　翠屏莊

翠屏莊では、何は扨て置き、先づ文珠菩薩を拜した。菩薩は廣き厨子の裡に、獅子の背上に坐して在す。而して其の周邊には、優顚王、善財童子、淨名居士、佛陀波利の諸眷屬、相ひ列し、如何にも堂々たる大一座、宛も滿堂を壓する氣分だ。而して厨子の上には、陶庵老公の普照の額が掛けられてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊

此れは南都大乘院傳來にて、一時山条君—山本条太郎君—の許に寓して、庫中に打込れつゝあつたが。今や漸く其の本來の光明を、發揮し來つた譯と云ふ。成程山条君には、寧ろローダンの鑄像抔が相應であるかも知れない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

文珠は勿論、其の獅子や、諸眷屬、何れも鎌倉時代の精粹が現呈せられてゐる。特に善財童子や、佛陀波利の如きは、面目生動、技神に迫るの心地がする。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

從來作者に就ては、未詳であつたが、去る頃修理の際、獅子坐に康圓作の銘文を發見した。康圓は運慶の門人にして、壽永二年運慶發願寫經の際、清水寺に使ひして、硯水を取りに赴きたる記錄がある。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等は更らに樓上にて、午餐の馳走に預つた。『目に青葉山郭公初鰹』の句があるが。今や晩春の季節、殘花靡亂、老鶯樹間に囀するの際、鰹のたゝき（土佐特有の料理、鮮魚の身を、藁火にて燒き、大塊の儘、之を喫す、先づ鰹のビフステーキとも云ふ可きもの）や、筍や、蕗や、若しくは青豆や、何れも季節と、土地に因みあるもの。主人の用意以て知る可し。予は荻野君と互ひに健啖の禮讃を交換したが、荻野君の說にては、兩人とも、黑板博士の足元にも、寄り附けないとのことであつた。何事にも上には上のあるものだと、つくづく觀念した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

楣間には建治元年在銘の掛け佛があり、又た脇床には、元應二年の聖德太子立像がある。老妻は我等の外孫の或者が、能くも太子の御像に肖てゐる抔と申してゐた。僧上の申分とて、一喝を加へたが、婦人には婦人らしき觀察だと亦た一笑した。太子御像は、康俊作にて、康俊は運慶の孫である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

更らに澁茶を喫しつゝ、若干の古文書、幅物の類を觀た。中にも竹田の小幀、左右上下何れも尺に滿たざるもの。梅花屋を繞り、寒月空にあり。清淺の流は、庭除に濺ぎ、蕭々たる叢竹は、墻邊に連り、亭々たる老樹は、屋後に聳えて、其の背景を爲す。而して其の餘白の上邊に、小楷もて、滿江紅詞を書す。眞に是れ精金美玉、書畫双絶、欽賞已む能はなかつた。

四　光觸寺の頰燒阿彌陀と其の緣起

此から小泉君の案内にて、十二所の光觸寺に出掛けた。十二所は金澤街道の漸く進んで、朝比奈切通に近き邊だ。隨處に桃花や、山櫻や、大島櫻や、菜花や、蓮華草や、椿や、連翹抔が、咲いてゐる。一路の芳草は萋々として、蹈り去るも、いと惜しき心地した。

＊　＊　＊　＊　＊

光觸寺の本尊頰燒阿彌陀は、國寶にして、湛慶の作と傳へられてゐる。小泉君は此こそ眞の運慶作であらうと云うてゐた。何れにしても其の緣起は、無住法師の砂石集にも出でてゐる。卽ち鎌倉の金持が、其の近く召仕ふ女童の念佛を申すを瞋りて、錢を燒いて頰に當て、之を懲らしめたるに、持佛堂の阿彌陀が身代りとなりて、其の頰に錢の燒痕を印したりといふ話だ。無住法師は、正和元年十月八十七歲にて逝きたる人なれば、それにて阿彌陀像彫刻の年代は、略ぼ推知せらる可し。

＊　＊　＊　＊　＊

又た國寶として其の緣起がある。寺傳では詞書は藤原爲家、繪は土佐光興とある。紙本淡彩二卷にして、書も結構だが、繪は猶更だ。筆意瀟洒にして、優雅、淡泊にして、秀朗。如何にも手輕く、自由に、且つ自然に出來てゐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

緣起の卷末には、

此繪不レ慮感得之間、多年所レ奉二所持一也。然此本尊十二所道場御座之由、承及之際、爲レ增二利益一、所レ奉レ寄二進彼道場一也。于レ時文和第四之曆、暮秋下旬之候而已。法印權僧都淸嚴。

とある。されば此の緣起も、頗燒阿彌陀の彫刻と、其の相距る遠からざる時代に出來たことが判知る。但だ淸嚴僧都が、如何にして何處より感得したる乎。是れが分明でないから、其の製作の歲時と、製作者とを確知する能はざるも、少くとも文和以前であることは明白だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

尙ほ此の緣起は、立派なる蒔繪の箱に入れてある。外面は黑漆金泥にて、頗燒阿彌陀緣起二卷と書し、裏面は梨子地、金泥にて、

延寶四辰年七月廿八日修覆並箱奉レ寄二進之一
豐後國府內前城主
松平左近入道如圓

と書してある。

府內と云へば、今の大分市だ。此の緣起が如何なる由緣ありて、如圓入道の手に修覆せられ、且つ外箱をも寄進せられたる乎。それも不明である。されど此の緣起と、頗燒阿彌陀佛とは、到底離る可らざる因緣があるものと思はる。

五　杉本觀音堂と覺園寺

光觸寺から踵を回らして、杉本觀音堂に赴いた。此處は大藏觀音と稱し、大藏往還の北にある。天平六年行基菩薩の開基と傳へられ、坂東三十三觀音第一番の

札所だ。

＊　＊　＊

觀音堂は幾十級の石磴を上り、大藏山の半腹にある。老杉が林立してゐる。其の間には、山櫻や、大島櫻が、斑々咲いてゐる。如何にも長閑に、物靜かなる光景だ。

＊　＊　＊

本尊十一面觀世音は、三體在す。中尊は慈覺の作、右方は行基の作、左方は惠心の作と傳へられてゐるが、何れも平安朝のものらしく思はる。而して左方の一體は、或は半製の儘ではあるまい乎。

＊　＊　＊

本堂の側なる藪蔭には、幾十基ともなく、小さき五輪塔が列をなしてゐる。何れも鎌倉から足利時代のものらしく見えた。定めて由緒のある人々のものであらう。

＊　＊　＊

此れから鎌倉宮の鳥居を横りて、藥師谷に赴いた。鎌倉宮には約四十年前、參拜した。吾妻は生れて漸く一年を經たる長女を脊負ひ、炎天七月、流汗淋漓として、長谷寺から此所迄たどり著いたことなど、端なく想起し、實に半生を夢の如く過し去ることを覺えた。

＊　＊　＊

鎌倉の隣驛逗子は、予の第二の家鄕だ。特に大正八年から十二年までは、逗子に過した。鎌倉に就ても固より、若干の知識は持つ可き筈だ。されど燈臺下暗しで、藥師谷などに足を踏み入れたることなく、亦た其の谷の奥に覺園寺の在ることさへ、知らなかつた。

＊　＊　＊

鎌倉宮の社殿の前から左に折れて、田圃の小路を行けば、左右の崖は追々と迫りて來る。田は一面蓮華草の花が毛氈を敷いてゐる。山には若葉の間に、山櫻や、大島櫻が開いてゐる。二町餘も奥に進めば、其の行き當りたる所に、小杜があり。孟宗藪やら、雜木林や、椿の花や、山櫻や、殆んど自然に生じ、自然に發きたる裡に、茅屋がある。これが覺園寺だ。

＊　＊　＊　＊　＊

此寺は建保六年七月、北條義時が靈夢に因りて創立したるもの。我等は先づ方丈の縁に腰打掛けて、清水を滿喫した。和尚は此處の清水は鎌倉第一と誇つたが、實に甘かつた。恐らくは先刻來の疲勞の爲めでもあらう。

＊　＊　＊　＊　＊

國寶の地藏は、交番所程の小屋に奉安して在る。此の地藏は黑地藏と云ひ、又た火燒地藏とも云ふ。此の地藏の奇瑞多かつたことも、無住法師の砂石集にも見えてゐる。本來は鎌倉の海濱に在つたが、理智光寺開山の願行上人が、此處に移したと云ふことだ。地震で大破損せられたが、今や素人には其の痕跡が、見出されない程度に修繕せられてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊

それから藥師堂に赴いたが、上下動の爲めに、須彌壇が毀れ、本尊の藥師から十二神將まで、何れも首を失ひ、手足を撈がれ、その儘放棄して、目も當られぬ樣體だ。

＊　＊　＊　＊　＊

鹿子木博士は、之を見て國家が餘りに不親切であり、無理解である。斯る日本國民性の發揮せらたる精粹を、閑却する抔とは、以の外の事だと憤慨したが、一行何れも共鳴しないものは無かつた。

＊　＊　＊　＊　＊

覺園寺は眇乎たる建物だが、由緒古く、且つ重き爲め、古文書抔も多かつた。されど時間が無かつたから割愛した。

六　寶戒寺と明珍君

此から小泉君翠屏莊の前を過ぎ、小町の寶戒寺に赴いた。此寺は足利尊氏が、北條氏一門の菩提を弔ふ爲め、後醍醐天皇に奏請し、建武二年建立したるもの。開基は高時調伏で有名なる圓觀僧正にして、二代慈源和尚は尊氏の子だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

大正十二年九月の震災に、山門、本堂、其他の建物を燒き盡して、今や庫裡を存するのみだ。されど本尊の地藏尊や、歡喜天などは、賴ひに存在してゐる。又た近頃ろ國寶に指定せられたる、慈源和尚の木像などもある。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

庫裡の一隅には、明珍恒男君の美術病院がある。蓋し明珍君は、美術の外科醫として、先づ名人と云ふ可き類に入る資格がある。如何なる破損の佛樣でも、一だび彼の手を經れば、乍ち原形に復する。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

鎌倉に於ける國寶が、兎も角も多からざる經費と、少き歲時とによりて、今日の如く恢復したるは、必らずしも君一人の力とは云はぬが、君の力も亦た與りて大に居ることは、誰しも識認する。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等は君の病院にて、種々の患者を觀た。中にも荻野君が江の島神社の棚の隅から發見したる、木彫裸體の辨天像の如きは、宛も鶴岡舞樂院のそれと、殆んど同時代にして、異曲同工とでも云ふ可き歟。鶴岡のそれに比すれば、彼は雄渾であ

り、此は秀俊である。而して何れも鎌倉時代の特色は、遺憾なく發現してゐる。

＊　＊　＊　＊

明珍君曰く、僕青年の時、先生の補綴論を讀み『亡國の看板は、補綴、修繕を怠るより著明なるはなし』に至り、大いに感ずる所あり、以て斯の專門に進んだと。此れは幾分明珍君の、予に對するお世辭とするも、予に取りては、實に今日に於ける第一の收穫であつた。

＊　＊　＊　＊

此文は明治三十六年四月廿六日の國民新聞に掲げたる、補綴論にして、更らに三十七年五月二日發行の『第四日曜講壇』に採錄したるもの。其の何れを明珍君が讀みたるを詳にせざるも、君の如き天下の名工を打出するに、予の拙文が、若干にても貢献したりと云へば、文章報國の本望として、此程有り難きことはあるまい。

＊　＊　＊　＊

斯くて翠屏莊に還りて、喫茶小話の後、主人の好意にて、我等一同その自動車にて歸途に就いたのは、午後六時、而して大森停車場前にて、自動車を下り、荻野、鹿子木兩君に分れ、山王草堂に歸著したのは、八時十分であつた。

＊　＊　＊　＊

我等は鹿子木博士の陪賓として、近頃甚だ愉快にして、且つ有益なる一日を暮らした。小泉君の好意は勿論、荻野君の指教を忝うし、眞に樂しみつゝ、面白く且つ善き學問をした。

（昭和二年四月）

十一月一日の小歴史

十一月一日、日曜の朝、鎌倉小町園に赴き、病後を養ふ野田君大塊を訪ふ、乃ち相携へて、山の内東慶寺に抵り、宗演老漢（理りて措く老漢とは敬稱也）の七周忌法會に參列す。演師遷化の際は、予亦た病を抱いて、逗子老龍庵に呻吟中であつた。今ま此の法會に參列し、一瓣の香を、靈牌の前に手向くるを得たるは、せめてもの心遣りだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

大正十二年九月三日、予が大震後、逗子より徒歩にて東京に還るの途次、東慶寺を見舞ふや。滿目荒殘、實に凄慘を極めてゐた。剩すものは、只だ一の鐘樓のみであつた。而して瑞鹿一山の僧衆、概ね疵をつつんで、地上に横臥してゐた。予は其間を通り脱け、勿體なくも泥土に委したる佛樣の光背の上を、草鞋もて踏過し、漸く拐伽窟に登り、偬忙演師の墳を一拜し去つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

今や東慶寺は、後住禪忠和尚の努力にて、新築七八分成り、殆んど舊觀に復し、而して演師の法子法孫、及び幾多の知己親友相集りて、其の法會を營む。演師知るあらば、必ず眉を昂げて微笑するであらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等二人は雨を衝いて小町園に還り、同列の阿部無佛、石井積翠の諸同人と小話し、予は更らに逗子に赴き、櫻山莊を見舞うた。予と與に今朝大森を發したる老妻は、既に先著し、莊主夫婦と共に、午前中は、櫻山に上り、家淇水翁易簀二個月前に移植したる、檜樹の枝拂ひをなし、薪十把を得たと云ふ。（嫗は川に洗濯と云ふが、今や嫗は山に柴刈りに往いた、好笑、好笑。）然も午後は雨にて中止して

ゐた。乃ち興に老龍庵に抵つた。四顧濛々、獨り野菊の滿意に、秋雨の中に亂れ咲きたるが、唯一の佳趣であつた。此の野菊は、大谷光瑞師の、支那西湖の畔より採集して贈られたるもの。乃ち之を折りて、又た雨を衝き、晩來大森に還つた。今日は雨に縁あることよ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

宗演老漢の遷化は實に、六十一歳であつた。若し渠に十年の壽命を假したならば、彼は立流なる高僧となり得たのみでなく、亦た其の化導の偉大なるものがあつたであらう。之を思へば、彼の死は、今更の如く嘆惜に餘りありだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

歸來成簣堂文庫の架上より一冊を取り出せば、是れ老漢の著述『金剛經蛇足』にして、其の表紙の面には『大正五年七月二日宗演師所贈』と記してある。而して表紙を翻へせば、その內裏には、大正丙辰七月初二、萬熊を拉へて圓覺寺に赴く、宗演師上堂式に參せんが爲めも。式了りて方丈にて小齋を喫し、轉じて大浦氏を訪ふ。此日炎熱蒸すが如く、衣巾皆な濕ふ、流汗淋漓、蘇峰學人

とある。此れは演師が、中間二十五年を隔てゝ、再度圓覺寺管長の上任式の際に贈られたるものだ。予は此卷に對して、坐ろに往事を追懷するを禁じ得なかつた。感傷的と嗤ふ勿れ。六十を過ぎては、動脈ばかりでなく、人間の心腸は、概ね硬化するもの。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

書中の人、皆な亡し。然も賴ひに友人大塊、無佛兩翁の如き、本年大患に罹りたるも、閻羅廳前の關門固くして、何れも人間世に背進し來る。亦た聊か我懷を慰するに足るものがある。

一切有爲法、　如夢幻泡影、

如露亦如電、　應作如是觀。

（大正十四年十一月一日夜　大森山王草堂に於て）

舊知の富岳

久し振りに逗子の老龍庵を音信れた。本年は殊の外多事にて、恐らくは新年から一兩回に過ぎまい。しかして偶々來ても、舊知である富岳は殆んど顏を出さない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日は祭日でもなく、日曜でもない。予は所用もて、逗子櫻山莊に赴いた。それを果すや否や、直ちに櫻山に上つた。好天氣ではあつたが、逗子名物の南西風は吹きすさんだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

山徑を分け上れば、たちまち松林の隙間から、相模灘が開展し、繪島を前景として、富岳が、その全身を露出した。然も雪は殆んどその半身を埋めてゐた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

予は豫期しなかつた舊友に出會した以上の快感に打たれた。一時は茫然として相對した。然もその崇高なる山の靈威を引き立つべく陪列する天城、金時、二子、足柄の諸山より。近くは大磯の高麗山若しくは大山附近の連峰さへも、鮮明に立ち並んだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

山を下りて老龍庵に入り、觀瀾亭に到れば、風に激する相洋の白浪は、殆んど滔天の勢ひをなし、その上に富岳は、浮んでゐる。眞に海中から湧き出した趣がある。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

予は大正八年八月の初から、大正十二年九月の初まで、この亭に生活し、日夕富岳と相對した。予は畫家や詩人の眼なきも、その雲烟變幻の千態萬狀を、看過し難く。ために望岳日記ともいふ可きものが出で來つた。その記事は寧ろ乾燥無味にして、航海士の航海日記程でもない。試みに大正十二年三月の一項を見るに曰く、

三月廿二廿三、天氣漸佳、至二廿四日一臥床中見二富岳一、此日眞好天氣也。

予は四時乃至五時には起床すれば臥床中に富士を見るは、早曉であるは勿論だ。予は寒暑を論ぜず、硝子障子のみにし、雨戸を使用せざれば、臥しても起きても、富士を見るに差支ない。差支はこの方よりも、寧ろ富士にあり。中々思ふ樣に、雲帷を出で來らない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

近世の人物として、富岳と最も相親みたるもの、恐らくは伊藤公に若く者なからむ。藤公詩存の中にも、富岳に關する作は、多くある。これは公が小田原や、大磯に卜居したるためでもあらうが、それよりも公の心意氣が、この靈山と何處やら相通じたるためであらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

曾て西園寺公の邸において、藤公が富岳を描き。

滄浪閣外玉芙蓉。　無限雲烟望萬重。
千古英雄孰如レ此。　欲下携二筆硯一往上相從。

の一首を題したる額を見た。恐らくは三十年前の事であらうが、今なほ眼前に髣髴としてゐる。

（昭和四年三月二十二日　逗子老龍庵に於て）

山靈瞋る

富士不見紀行

予が清水市外、鐵舟寺畔の小阜杉原山の頂上に、詩碑を建立したのは、大正十五年の十月であつた。爾來多事に取り紛れて、之を訪ふに遑なかつた。

＊　＊　＊　＊　＊

本年は紀元節と、日曜とが連續して、二日の休暇が出來た。故に何よりも先づ此の機會を以て詩碑を訪問す可く出掛けた。

＊　＊　＊　＊　＊

然るに十日の好天氣に引き代へ、我が大森山玉艸堂の邊には、十一日曉來霰、霙が降つた。大磯、國府津邊では雨となつた。箱根山中は、雪片綿の如く、降り

しきつた。沼津の停車場にて、觀海池谷翁と相見た。天は何故に此の恬淡なる詩人に祉せざる乎。翁や頻年其の家族を喪ひ、今や一家剩す所、翁と其の諸孫のみ。予は偏へに翁の詩骨の健全を祈りて別れた。

＊　＊　＊　＊　＊

靜岡にて諸友に迎へられ、雨を冒して鐵舟寺に赴いた。和尚を初め、清水市の諸友は既に待てゐた。我等は山門をくゞり、半ば零落したる梅花の下を過ぎ、設けの席に就いた。和尚の馳走にて、快談夜に入つた。

十二日には、曇天ではあつたが、雨は止んだ。富士山の頂上には、白雲が徂徠してゐる。泥を蹴て詩碑を訪うた。附近有志者、青年諸君の努力にて、道も立派だし、掃除も行屆いてゐる。枯れたる松も植換られてゐる。四圍の風光、眞に佳。但だ殘念なのは、富士山が顏を出さぬ。轉じて觀音山に上り方さに下らんとするや、乍ち雲破れ、山は半腹以上を露はした。滿山玉玲瓏。知る是れ昨來の雪。更

らに再び詩碑を訪うた。乍ち雲は富士山の全面目を封じ去つた。待てども開かない、已むを得ず惆悵として去つた。

＊　＊　＊　＊

惟ふにせめて毎年一回は、杉原山上から見參す可きであつたが、昨年失敬したるが爲めに、山靈の機嫌を損じたのであらう。それ以外に、別に山靈の瞋に觸れたる覺えはない。果して然らば山靈もちと意地が惡る過ぎる樣だ。併し弱味は此方にある。懺悔の外はない。

＊　＊　＊　＊

清水市の有志諸君は、誘うて築港を見せしめ、併せて灣内にて、差網を投じて漁を觀せしめた。風はやゝ寒かつたが、興は多かつた。

＊　＊　＊　＊

斯くて靜岡に還り、葵文庫に抵り、稻川先生の遺稿や、駿遠の地誌抔を見、特急にて還つた。富士山の代りに、三保灣の魚を携へて。

＊　＊　＊　＊

隨處選擧ならざるはなし。東海道の松並木さへも、選擧の赤きポスターを張られてゐる。斯る時代に選擧に無關心にて、遊び廻る我等は、寔とに果報者である。

＊　＊　＊　＊

昭和三年二月十三日、綾惡くや好天氣、麗日和風、窓外の梅花は、陽光を帶んで、我が書幃に薰じてゐる。人事意の如くならざるもの、眞に十に八九だ。

（昭和三年二月十五日）

寶珠莊の半日

最初の普選實施の前日、二月十九日、蒲原寶珠莊に田中青山老伯を訪ふ。

淺峰子と相拉へて、早朝山王草堂を出づ。庭上の霜は雪より白、寸餘の霜柱踏んで珊々聲あり。

＊　＊　＊

半日富士山と相對して、正午過ぎ寶珠莊に著す。其の既に半ば散りつゝある梅花の墻を横ぎり、直ちに莊主老伯に迎られ、午餐から晩餐に至つた。清談正味四時間半。青山老伯耆齡八十六、齒牙堅牢、堅餅や、八ッ橋の類を、平然として嚼む。其の老健想ふ可し。

＊　＊　＊

予曾て大正十四年五月廿四日、寶珠莊を訪ひ、一宿して去つた。去るに臨み老伯は、予に貽るに安政六年己未、水戸に賜はりたる密勅二通の謄本を以てした。

＊　＊　＊

天下誰しも安政五年戊午の、水戸に賜はりたる勅諚を知つてゐる。されど其の翌年の密勅に至りては、極めて少數者以外には、知る者は無かつた。殊に密勅の文字が、頗る嚴重、且つ緊切でありて、或は僞作ではあるまいかと、疑ふ者さへあつた。

＊　＊　＊

然るに來る三月、水戸義公生誕三百年記念展覽會を、青山會館に開かんとするや。水戸の德川侯爵家に於て、其の原文が發見せられた。其の顚末に就ては、德川侯爵家と緣故ある、高橋箒菴君が、近日發表することゝなつてゐるから、姑らくそれに讓ることゝする。

＊　＊　＊

但だ予は多年其の原書に接觸せんと心掛けたる甲斐ありて、其志を達し得たる吉報と、德川侯爵家の允可を得て、其の原書の撮影とを齎らして、之を老伯に語

し、且つ示した。而して老伯の喜び知る可き也。

＊　＊　＊　＊　＊

老伯今や當世に意なきも、其の耿々報國の念は、自から休歇する能はず。帝室を首とし奉り、其他故郷土佐なる青山文庫、早稲田大學、青山會館等に、其の多年苦心して蒐收したる、維新回天の事業に、直接間接に干係したる、諸志士の遺墨を擧げて、分配したことは、予が既に記したる通りだ。當日も老伯と共に、亦た遺墨に就て商搉し、景仰、欽嘆、其間殆んど喫茶の餘裕さへなき程であつた。

＊　＊　＊　＊　＊

辭莊黄昏に近し。汽車窓外但だ富士山の白雪のみ、暗中に聳え、相送りて依々たる狀あり。歸廬既に午夜に近かつた。

（昭和三年二月二十三日）

函嶺雨中遊記

一　明巢狙ひ

明巢狙ひと云ふ言葉は、餘りに上品な言葉ではない。併し事實なれば致方がない。昭和二年の晩春、曾て函嶺の麓、翠雲書伯の不在を時として、其の長興山莊に遊び、轉た快適を覺えた。（參照　名山遊記、二一五―二三〇）一度あることは二度ある。其の味を覺えた我等は、又たしも主人の好意に甘へて、出掛くることとなつた。實は八月三日を期としたが、颱風逆襲の警報に驚かされて、一日を延期し、四日とした。

＊　＊　＊　＊　＊

八月四日、先づ晴天を祈つた。併し天氣都合は、卽今舊政友本黨諸君の態度と一

般、何れもはつきりしない。如何にも厄介な天氣だ。

＊　＊　＊

予は吉屋信子女史から寄贈せられたる『空の彼方』を讀み始めた。此れは曾て主婦之友に連載せられ、好評を博し、今は映畫ともなりて、各所に興行せられつゝある。

＊　＊　＊

予には小說を讀むことが、最も骨が折れる。寧ろ餘儀なく讀む。自から好んで讀むものは、十の二三に過ぎない。但だ吉屋女史の作物は、概して骨の折れない一だ。其の何故と云ふことは姑らく措いて。

＊　＊　＊

六合川の水は、岸に平かならんとし、馬入川の水は、橋の一片を呑み盡さんとしたが、酒匂川の水は、たゞ濁りたるまでゝ、濁波滔々と云ふ程ではなかつた。而して早川の水は、聊か濁りたるまでゝあつた。長興山莊の留守居は、小田原迄我等を迎へくれた。自動車に乘れば、既に雨となつた。

＊　＊　＊

我等は湯本から曲りくねりたる道を、兎も角も自動車にて須雲川の橋を渡り、長興山莊に入つた。前遊に比すれば、震災の跡は全く一掃せられて、雨花風葉、何れも一段の幽趣を加へ來つた。

＊　＊　＊

雨は頻りに降り募つた。予は一浴の後、入側附十六疊の眞中に、大の字となりて、約二時間午眠を貪つた。固より天下取る夢など見る元氣のある可き筈はない。さりとて莊周の如く、蝴蝶となりて花に遊ぶ程、悟りきつたる夢も見ない。

＊　＊　＊

予は起き來り、緣側に腰打掛け、雨に染みたる半は野生的の庭芝の向ふに、赤き姫百合の寂しく咲きゐるを眺めつゝ、遂ひに『空の彼方』を讀み了つた。此れは

吉屋女史の傑作である乎、否乎を詳にしないが、家庭小説としては、恐らくは成功したる一であらう。我等老人の目にも、何等不健全と申す點は、見出さなかつた。但だ吉屋女史のヰビキビしたる慣用の文字には、遂ひに接するを得なかつたのは、當初より教訓的の家庭小説を、目標とした爲めであらう。

二　閑中の讀書

八月五日、今日は長尾峠から籠阪峠を越えて、河口湖邊まで、遠征のつもりであつたが、夜來の雨、愈よ急、且つ激、門外は愚ろか、庭前にさへも蹈み出し難い。仍りて臥遊を事とした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

吉屋女史の『空の彼方』を讀み了り、更らに讀みかけたるルードウィヒの『最後の獨逸皇帝』を讀んだ。ルードウィヒ氏は、別に奈翁傳、比公傳、ゲーテ傳、人物論纂、最近には基督傳等の著述がある。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

基督傳は頗る評判が惡く、聊か當人としては、味噌をつけたる樣であるが、其他は何れも好評嘖々だ。予は奈翁傳、比公傳、人物論纂等を一讀したが、其の作品としては、それぞれ等差があるが、讀んだことを後悔する程のことは無つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

獨逸皇帝傳は、別に著者が新材料を發見したと云ふではなく、但だ現在世に存する凡有る材料から、其の必要と認むる資料を抽取して、茲に一個の獨逸皇帝傳を構成したるものだ。而して別に皇帝に對して、善意もなく、惡意もなく、唯だ解剖學者が、屍體を解剖する如く、肖像畫家が、肖像を描く如く、忌憚なく、會釋なく、遠慮なく、思ふ存分にやりつけてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

予は向きに獨逸皇帝の自叙傳を讀んだ。此の兩著を對照すれば、實に眞相に幾さ獨逸皇帝が浮び出づる。要するに彼は餓鬼大將だ。彼の一生には、殆んど自省、內觀の痕跡が無つた。彼は群小を集めて、自から聰明睿智の君主を以て誇とした。彼は全く氣紛れである。彼には殆んど信用の要素が缺乏してゐた。甲の秘密を乙に漏らし、乙の秘密を甲に漏らし。其間に於て、自己の利を占めんとするが如きは、彼の一生を通じての慣用手段であつた。彼が父フリドリヒの虛榮心、修飾心と、母ヴィクトリアの我意、執拗と、卽ち其の父母の短所、弱點のみを遺傳したと云ふ說は、中らずと雖も、遠からずだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日の歷史家は、概ね大勢論や、環境說に重きを措き、個人的要素を輕視し、若しくは無視する傾向がある。されど一人にして國を亡す者もある。一人にして國を興す者もある。獨逸皇帝の如きは、世界大戰の、唯一の責任者と云はざるも、其の責任者の重なる一人であることは、ルードウィヒ氏の一書が、能く之を語り、詳く之を證明する。

三　雨　又　雨

雨中の函嶺は、寂靜其物だ。人聲もなく、車馬の音もなく、而して餘りの大雨にて、幽禽さへも鳴りをしづめてゐる。唯だ轟くのは、懸崖の飛泉と、門前須雲川の激流。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

連日傾レ盆雨。　石泉奔二百雷一。
門前絕二過客一。　空翠上レ階來。

眞に眼前青一色。雨に愉快を感ずる者は、庭前の野草のみ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

空齋無二一事一。　讀倦枕レ書眠。
不老靈泉在。　浴來身欲レ仙。

此れも實況だ。不老泉とは、長興山莊の溫泉の名である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

主人能待レ客。　眠食兩安舒。
朝喫後圃菜。　夕餐前澗魚。

此の主人は複數である。長興山莊主は勿論だが、隣家の花の茶屋主人井上君も亦た、御馳走には拔目がない。前澗魚とは、須雲川の鮎の鹽燒である。されど恐らくは此の滔々たる濁流に、鮎も押し流さるゝであらう。されば當分は此れ限りとせねばなるまい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

世情天意謾悠悠。　何用書生爲二國憂一。
堪レ異鑠金三伏日。　蕭條積雨冷レ於レ秋。

本年は御大禮の歳だ。若し萬一凶年、饑歳ともなりたらば、如何に不幸である可きよ。草莽の老書生も、一片殷憂なき能はず。大抵のところで、天候も恢復あれかし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

午後には東京から、長興山莊主人を代表して、中川黃山君が、ちまきやの菓子を携へ、來訪せらる。兩ながら驩迎の情に勝へない。隣家花の茶屋にて、晩餐を共にす。同行の淺峰子も、獻酬の相手が出來て、大慶至極の樣だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

八月六日、今日も雨、雨、又雨。風は全く凪たが、その代りに雨は倍〻猛烈だ。我等閑遊の客には、唯だ外出が出來ないだけの不便に止まる。此れが爲めに當

惑する者幾千百萬、勝げて數ふ可らず。

四　留岡君を訪ふ

明七日は、雨が降つても、槍が降つても、歸らねばならぬ。されば豫て期したる留岡君の病を訪ふは、卽今を措いては時間がない。

＊　＊　＊　＊　＊

斯くて我等は大雨を衝いて、湯本から塔の澤、宮の下を經て、木賀なる古河男爵別墅に赴いた。

＊　＊　＊　＊　＊

今は函嶺の書入時だ。溪山隨處に人や車が、追逐する際だ。然るに如何にも寂寞だ。向ふから富士屋の乘合自動車が來たが、廣さ箱の內にはたつた一人のお客さ

んだ。

＊　＊　＊　＊　＊

但だ雲は山の岑を掩うてゐるが、此處にも、彼處にも、臨時の瀑布が出來てゐる。苟も山の襞をなす所は、殆んど皆な瀑布だ。然も其勢頗る凄まじく、飛沫は人に迫つてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊

濕雲封ニ峻嶺一。崖樹碧レ于レ烟。
十日山中雨。懸爲ニ百道泉一。

全く此れは實景だ。

＊　＊　＊　＊　＊

木賀は山內容堂、木戸松菊、若しくは元田東野先生などの曾遊地だ。往時は函嶺七湯の中にて、重なる一であつたが、今は宮の下や塔の澤に、其の繁昌を奪はれ

たる姿だ。而して古河男の別墅も、舊溫泉宿であつたと云ふ。

＊　＊　＊

大正十二年の震災に、其の一半を崩壞したと聞くが、其の剩存したる部分にても、泉石、嘉木の幽勝、低徊已む能はざらしめた。

＊　＊　＊

留岡君夫婦は、我等を迎へ、其の飛泉と相接する小亭に對坐し、互ひに混布湯を啜りて閑談した。此の飛泉は、雨の爲めでなく、古河男が、山上の水源地より導き來りたるものゝ由にて、其の水量も恒に一定してゐると云ふ。眼前水晶簾を掛けたるが如く、光景眞に愛す可きも、水聲動もすれば、人語を攪すの虞がある。

衝破函山萬重雲。　水聲激激雨紛紛。
孤亭對坐何須レ說。　相許相知我與レ君。

韓退之の山石の詩に、『水聲激々風吹レ衣』の句ありやに記憶す。

＊　＊　＊

留岡君の病氣は思ひの外、恢復してゐる。聊か安心した。然も今後は特に自愛を要す。

＊　＊　＊

五　眠　福

久雨厭々愁ニ殺人一。八月七日、數日來降り續きにて、今日も定めて同樣と云うてゐたが、雨戸を明くれば、旭光が既に庭向ふの翠杉を透して漏れてゐる。生憎のこと、今日は歸らねばならぬ。斯くて我等は全く函嶺まで、雨に降り籠められゝ爲めに來つた。

＊　＊　＊

併し我等は必らずしも雨を詛ふものではない。東坡は『雨奇晴好兩相宜』と云

うたが、全く其通りだ。問題は要するに程度である。如何に雨奇でも、連朝連夜の降り續きでは、聊か閉口する。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

但し我等は仕合者だ。長興山莊の全部を、我物顔に占領し、勝手の振舞をした。而して隣家は花の茶屋だ。主人井上君は、京都西陣の舊家で、其の趣味から料理の研究家となり、東京數寄屋橋附近に花の茶屋を開き。今や更らに其の支店を此處に設けてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等は又た井上君の厚意にて、毎々馳走になつた。君は料理は時と場所に應じて、恒に適應し、恒に變化を主とすると語つてゐるが、全く其通りであつた。云はゞ三日三夜花の茶屋に居續けしたのも同樣だ。曾て大倉聽松君は、支那料理の名人に就て、其の全然一個の藝術家たる特性を、把持してゐることを語つたが、何事も其の奥義に詣れば、其通りであり、又た其通りであらねばならぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

予は閑に任せて、讀書するつもりであつたが、讀書よりも、寧ろ書を枕にして眠つた。眠ることは、何んでもない。されど世には往々にして眠れない人がある。新島先生の如きは、恐らくは三十歳臺から、催眠藥を藉りて眠つたと思はる。ローズベリ卿の如きは、八十歳の高齡に躋りつゝ、中年から不眠症に惱されてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

午眠などを以て、自から誇るは、痴の極である。されど午眠は、予に取りては再生の靈藥だ。一睡すれば、神氣爽快となる。但だ憾らくは其の機少く、偶まゝ几に隱りて假睡するのみ。函嶺の雨は、偶然にも予に眠福を惠賜した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

庭槐風靜綠陰多。睡起茶餘日影過。
自咲老來無二復夢一。間看行蟻上二南柯一。

此れは趙松雪の詩だ。古人にも午眠の禮讃者は少くない。世に福は多い、されど食福、浴福、閑福、而して眠福を同時に、贏ち得たる我等は、實に多福者である。

六　國寶の老松

必らずしも好天氣ではない。但だ雨の降らぬだけが仕合せだ。乃ち浴衣掛けにて、庭下駄をつっかけ、長興山莊の門を出づ。須雲川の水は渾り、且つ肥えてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

溯りて故山本唯三郎氏の別墅の下に至る。今や別に主人を迎へてゐる。門から庭の面目も一新してゐる。獨り參天の老樹のみは、人生の榮枯に無頓著の氣分もて、飛揚してゐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

釣橋を渡りて、玉垂れの瀧の下に至る。見料十錢は、保勝の爲めと云へば、不廉とも申さるまじ。大正十二年の地震にて、川床が六尺以上もあがりたりと云へば、玉垂れの瀧が、其實に副はざるも致方なし。但だ年と與に山水の間に於ける瘢痕が、漸く癒えつゝあることは、喜ぶ可し。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等は更らに石徑を踏み、竹林の中を攀ぢ、舊箱根街道の臺茶屋の邊に出でた。別に目的もない、街道を挾む老松を見んが爲めに。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

東海道の並木の松も、今尚ほ舊觀を存するものは、幾許もない。その中にても此

邊の松は、其尤である。繰り返して云ふが、此れは正しく國寶である。未來永劫、拂下げなどの事は無き樣に祈る。

石路崎嶇山驛邊。翠林深處有鳴蟬。
英雄覇業今何在。空向長松問往年。

此の松は歴史の象徴と云はんよりも、寧ろ歴史其物である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

例に仍りて早雲寺に詣し、今大路道三の墓や、北條五代の墓を弔した。北條五代の墓石は、固より徳川時代に建立したものであらう。但だそれが過大でないのが如何にも、殊勝である。調子外れたる石塔は、何となく山師の看板じみて、面白くない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

中川黄山君は、函嶺の秋を美なりとし、十一月來遊せんことを勸めた。されど十一月は御大典の期節、とても其の機はあるまい。されど其の好景を前想して、『雁來山葉紅』の五字を書して、花の茶屋主人に貽つた。但し良縁あらば、何時かは黄山君の誘引に應じたいと思ふ。乃ち此に記して長興山莊主人翠雲畫伯に、豫じめ希望して置く。

（昭和三年八月初七午前十一時半、長興山莊に於て）

大島遊記

一　靈岸島より大島元村

大正八年八月から大正十二年九月まで、逗子の野史亭に在りて、朝暮大島の三原山の噴火を眺め、何時かは一遊せんと心掛けた。頃ろは東京灣汽船會社が、橘丸、櫻丸の姉妹船もて、毎日定期航路を開き、大島の遊覽に好都合であるのみならず、海上快駛の樂をも、併せて消受することが出來ると云ふ評判なれば、愈よ出掛くることゝした。同行七人。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

六月十八日、夜來の雨はからりと霽れた。午前八時我等は橘丸の甲板上に立つてゐる。船は靈岸島から、そろそろ品川沖へ出掛けて行く。何時の間にやら、日本橋の魚河岸も、お濱離宮の側に移轉してゐる。曾て我等が汐干狩に、舟を浮べた所には、今は製紙會社の倉庫が建つてゐる。世の中は三日見ぬ間に櫻と云ふが、滄海桑田、實に轉瞬の間だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等は羽田沖を過ぎ、彼理が此邊まで乘り込んで、大江戸を鼎沸せしめた往事を語り、そよそよと吹き來る海風に、襟胸を披きつゝ、午前十時半には、午餐の卓に就いた。一行概して朝飯抜きにしたれば也。船には食堂もあり、神田の萬養軒の仕出しにて、一通りの洋食が出來る。特に菓物には、下田の夏橙や、大島の枇杷、何れも佳味であつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

觀音崎燈臺を過ぎ、浦賀、久里濱を右舷に眺め、劍崎燈臺を過ぎ、三崎、城ヶ島を過ぐれば、三浦半島の全景は、一目の中に在り。過般來彼理來航の歴史を編し

たる予には、今更ら此邊の風光に接して、坐ろに史情を催ほした。

＊　＊　＊　＊　＊

船長は天氣が霽れば、此邊から富士が見ゆると、殘念がつた。併しそれは慾だ。梅雨中今日程の好天氣は拾ひ物だ〻東京灣外に出づれば、大うねりはあるが、格別のことはない。最早大島は眼前に現はれた。御神火（噴煙）は直上して、雲柱を半天に立てゝゐる。やがて我等は泉津、岡田の諸村落を眺め、乳崎を過ぎ、元村に上陸した。時間は豫定二時を過ぐる僅かに十分。

＊　＊　＊　＊　＊

海岸には有志や、青年團諸君の出迎があり、且つ旗なども翻つてゐた。此れは我が一行を迎ふる爲めだとのことにて、頗る恐縮した。斯くて我等は直ちに三原館に投じた。

（昭和三年六月十九日午前六時、大島三原館に於て）

二　三原山に登る

我等が三原山登りに出掛けたのは、午後三時前であつた。（昭和三年六月十八日）三原館の庭前には、二個の山輿が並んでゐた。山輿とは申せ、紅白の布にて、青竹を捲き、それに大なる紅白の綱がついてゐる。要するに歌舞伎座の舞臺に見る可き代物だ。

＊　＊　＊　＊　＊

此れは故らに我等の爲めに、伊東から取り寄せたる由にて。それの元村に到著するや、人々は野増村（大島にて、元村の隣村）にて芝居興行あれば、正しくその爲めならんと、取り囃したさうだ。左もあるべし。されば此に乘る光榮を持つ二人の爺と婆とは、如何に旅の耻はかき捨てとは申せ、面羞す可きであらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等一行七人の外、藤井村長、立木青年團長、成瀨大島振興會幹事、其他青年團の諸君二十餘名、而して諸君を煩はして、我等夫妻を山上に運搬せしむるに至りては、何とも申譯がない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等は神立口から上つた。登山道路は元村から、殆ど一直線に山上に達してゐる。麓には杉林がある、松がある、枇杷畑がある、竹がある、篠がある。少しく上り行けば、椿や、大島櫻や、榛や、水木とて、何やら青桐に類したるものを多く見る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

途中には概して風光宜しき處に、茶店が二三ある。我等は只今もぎたてと思はる、大なる枇杷實にて、渴を醫した。大島名物としては、特に此の枇杷實が、最も賞す可き一であらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

當日は好天氣にて、既記の如く我等は橘丸甲板上から、御神火（三原山の噴烟）が雲柱の如く、天に達したるを見た程なれば、近く眺むれば、愈よ其の眞相が分明であつた。斯くて我等は一里十八丁の道を上り、外輪山の鏡端に達した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

途中は目白や、鶯や、杜鵑などを聞いた。同行者は黑き蛇がゐたと云うたが、予には見えなかつた。此地には鼬の外、別に野獸の類はゐないと云ふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

鏡端の直下は沙原である。此れが舊噴火口だ。それから三原山噴火口まで、滿目一大沙漠である。三宅博士、武雄等は、何れも火口に赴いた。此邊の光景は、何となくゴビ沙漠の沙丘を聯想せしむる。

三　三原山を下る

山上には概してウツギ、ヤシヤ、イヌツゲ類の灌木のみだ。今はウツギの花盛りである。鏡端の眺めは、實に絶景だ。一方には沙漠を挾んで、白く三原の噴火を眺め、他方には漫々たる伊豆海を隔てゝ、遠く富士及び天城一對の山を望む。而して海から吹き來る風は、山氣と和して、實に其の呼吸は、人間でない心地がする。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

我等は沙丘を下り、路を外輪山と內輪山との、溪谷の間に取りて行く。此邊雨期には川となり、池となる。平時は灌木生ひ茂り、殆んど樹海をなしてゐる。それに紅白の布にて捲きたる乘物をば、青年團諸君が、エイエイ聲して、遮二無二擔ぎて强行した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

擔ぐ諸君は勿論、乘る我等さへも、隨分閉口と云はんよりも、閉目した。そは最も危險なるは、木の枝や、荊棘にて、目を突く虞れがあるからだ。成瀨君が先導して、氣を附け呉れた爲め、仕合せした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

斯くて我等は湯場に達した。湯場は天然の蒸氣を利用して、土耳古流の蒸風呂が出來てゐる。山中の一軒家、如何にも人間離れがしてゐる。我等は蒸風呂に入る時間が無いから、唯だそれを見物した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此れから一氣に馳せ下つたが、途中にて日が暮れた。斯くて我等は漸く岡田、元村間の街道に入り、三原館に還つたのは、既に午後八時に近かつた。